

第 13 回高等学校改革プラン推進委員会（第四推進委員会）議事録

1 日時 平成 17 年 12 月 4 日（日）午後 2 時 30 分～午後 5 時 30 分

2 場所 サン・アルプス大町 2 階 大会議室

3 出席委員

中條 利治委員長	下川 隆委員
百瀬 哲夫副委員長	丸山 哲弘委員
小口 利幸委員	藤本 光世委員
宮川 正光委員	長谷川 功委員
小林 進委員	鈴木 義明委員
小山 勉委員	

4 開会

（中條委員長）

それでは、第 13 回第四通学区高校改革プラン推進委員会を開会いたします。

まず、前回第 12 回以降の他地区の状況および県会も開会しましたので、それらの状況につきまして県教委の方からご説明願います。

5 資料説明

（西牧主任教育支援主事）

お願いします。他通学区の状況でございますが、前回以降 11 月 23 日の水曜日に、第三推進委員会が開かれております。そこでは、各学区の小委員会で検討された、それぞれの再編整備候補案について、報告がされております。7 区からは、岡谷東高校と岡谷南高校の統合案が提案され、8 区からは箕輪工業高校を削減し、多部制・単位制高校に転換していく案が提案されております。9 区からは、具体的な校名を報告することができなかったということで、今日の午前中、報告があったのではないかと思います。今日の午前中のことにつきましては、後日ご報告ということでお願いをしたいと思います。

それから、11 月 27 日の日曜日でございますが、第二推進委員会が開かれております。そこでは、地域からの提案の中で、多部制・単位制高校に係わる提案があった二つの団体から、説明を受け、審議の参考にいたしました。望月高校を多部制・単位制に転換するという地域からの提案について、地域教育プラットフォームの活用などについて関心が示されております。また、望月高校と蓼科高校を統合して、新たな学校をつくることも提案され、今後引き続き議論をすることになっております。

続きまして 11 月 28 日の月曜日でございますが、第一推進委員会が開かれております。そこでは、まず第 1 区について、将来的に 1、ないし 2 校になるよう段階的に統合する方向性が確認され、当面は飯山市内の普通科 2 校または 3 校を統合し、2 校の校舎を利用する意見が出されております。それから、中野高校と中野実業高校を統合し、総合学科を設置することが再度確認され、地域から出された提案に対する意見が出されております。また、中条高校の現状を考えると、このまま設置しておくことが難しいということから、さまざまな意見が出され、これについても引き続き検討することになっております。以上で

ございます。

（中條委員長）

ありがとうございました。冒頭、報告を忘れましたが、本日は、今井委員、神澤委員、それから野口委員、お三方がご欠席ということで、14名中11名で進めてまいります。

（柳澤教育主幹）

すみません。今の報告で午前中のところだけ一言お願いします。

第三推進委員会の本日の午前中でございますが、先ほどの報告に加えまして、第9区、下伊那の方から飯田長姫高校と飯田工業高校を統合するというので、提案が出されているということでございます。先ほどの報告に加えまして、今日の他地域からのご報告でございます。

（中條委員長）

ありがとうございました。

先に、12月3日の新聞報道にあります、12月2日、県の教育委員会の定例会においてということで、県の教育委員会の高校教育課の方から、ちょっと新聞の文章がその通りかどうかわかりませんが、今年度内に、全県の高校再編を一括して策定する実施計画については、ある通学区が切り離された形での策定がないことはないような発言があった。それから、報告期限については、12月中がめどだが、状況によっては、1月初旬、中旬まででもいいというような内容が、報告されていますので、発言の内容、真意等含めて、吉江課長お願いできますでしょうか。

（吉江高校教育課長）

今、委員長さんからお話がありました2件についてお答えしたいと思います。

まず1点目の報告の時期についてですが、これは後ほど場合によりますと、議事録等でもご確認いただければと思っておりますが、第1回目の推進委員会が5月29日に開催されました。その時に私どもの方でスケジュール等を含めてお渡しした経過がございまして、その時に私が申し上げた言い方は、おおむね12月とは申し上げております。いわゆる12月を目途に、ぜひお願いしたいということを申し上げた後に、おおむね12月とは申し上げておりますけれども、場合によりますと、1月に入ることもあろうと思っておりますが、気持ちといたしましてはその近辺にご報告をちょうだいすれば、大変ありがたいと考えている次第でございますということを説明の中で申し上げた経過がございます。

また、委員さん方、先ほどの1枚紙のスケジュールをご覧くださいますと、12月のところだけは、括弧書きで（12月）ということで書いております。その意図はこういう意図であるということでお答えした経過がございまして、ほかの推進委員会におきましても何か質問があったときには、この意を受けまして1月初旬、中旬ということでお答えしているということで、ご理解いただきたいと思います。

それから、12月2日に教育委員会の定例会が11時からございました。それで教育委員会の定例会におきまして教育長報告事項ということで、それぞれ4つの推進委員会の現状

においての進捗状況につきまして、私の方でご説明を申し上げました。ご説明をした後に、若干ふれさせていただきましたが、今、現在におきまして、それぞれの推進委員会の今後の動向についてでございます。この折に私が申し上げたのは、まず今申し上げた内容になるのですが、12月までに報告いただきたいとお願いしているけれども、1月の初、中旬までにはぜひご報告をいただきたいとお願いをしている。それで、その状況の中で、現在それぞれの推進委員会においては、12月には、場合によれば、3回やりたいというようなご発言を内々にいただいているところもあり、このことから12月あるいは1月の初、中旬ということで、おおむね14回と考えていた開催日の回数も、プラス2、3回議論をしていただいて、なんとか報告をそれぞれの地区からいただくことを期待しているというようなことを申し上げました。

またそれに伴いまして、しかし、まだまだ十分な検討がなされなければいけないような地域もあるということを申し上げつつ、基本的には、私どもは、通学区ごとの推進委員会からいただいた報告を受けて、3月までに体系的に網羅するような形でまとめて教育委員会にかけた上で、実施計画を決定してもらいたいと考えている。この考えについては、今も全く変わったものではないと申し上げつつ、ただ、しかしながら今のそれぞれの通学区の情勢等を考えると、場合によってはある通学区を切り離した形での実施計画の策定という可能性が全くないわけではないと感じていると申し上げた。その上でございますが、今一番心配していることは、統合される学校とか、あるいはそのまま残っている学校というようなものは、それぞれ、現在の学校の施設、設備の状況、あるいは教育の状況というようなものが、そのままでいいということは全く考えていない。施設、設備等につきましても、直ちに手をつけたいと考えているが、実施計画を策定しない限り、万が一こういうような状況になると、その通学区ごとの学校の状況など、そういうようなものがはっきりしないということから、その地区を取り残すというような形にならざるを得ないということとを危惧していると。そういうことの中で、ぜひ回数を増やしてでも議論していただくというような委員会の動きもございますので、ぜひその方向で継続的に議論していただいて、なんとか今後の議論を進めていただく中で、当初の予定通り、おまとめいただくことをお願いしたいというような方向で、議論していただくことはありがたいというようなことを申し上げた次第でございます。

その状況の中で、私どもは、一番心配しておりますのが、先ほど、ちょっとふれさせていただきましたように、それぞれの通学区におきまして、実施計画というものが策定しない段階になりますと、この段階にいたりまして、それぞれの学校で例えば施設設備の要望、あるいは学科改編等がある場合に、学科改編をしたいというような要望、さらには、今後この学校をどうしていきたいというような要望があるにもかかわらず、どうしても全体的な姿が見えないために、手をつける状況に、ここまできるとならないというようなことを非常に危惧（きぐ）していると。ですからなおのこと、この状況の中で結論をまとめていただきたいということを、意を含めまして発言した次第でございます。以上でございます。

6 議事

(中條委員長)

ありがとうございました。今吉江課長からありました、5月29日第1回の全体会ではなく、我々の第1回推進委員会の中でも、仮に12月云々というお話の中で、今ご説明いただいたようなお話の中で、もし、我々としてその時に仮に結論づけができなければというご質問をさせていただいたと思いますが、その時に、場合によったら、両論併記ということというお話の中で、我々として、できるだけ方向付けをきちっとして、両論併記ではなく進めていきたいという願いを、確か、第1回の我々推進委員会でお願ひした記憶がございます。

そういう意味で、物理的な期間の方は限られてはいるわけですが、検討して、十分議論を尽くした上で、できるだけ我々の責任期間の中で、方向付けをさせていただきたいと考えておりますのでよろしくお願いします。

それでは、前回第12回の11月20日に行われました大北地区、第2回目になりますが、前回の議論について、総括的にまとめましたので、また、そのつながりをつけるためにも確認させていただきます。時間も限られていますので、少し早口になりますがご了承くださいと思います。

まず、大北地区全体の再編案ということで意見を出して議論をいたしました。その中で総数決定基準の5.5学級にはこだわらず、推進委員会として丁寧な議論が必要であるということ。それから、流出については、「卵と鶏」の関係と同じであって中学浪人を出さないという観点に立てば、大北地域の学級数を増やせるのではないかというご意見。それから、木曽と大北とは異なると。大北と比べ木曽は、普通科、職業科のバランスを考えて、普職逆転のないようにとの趣旨と思いますが、学級数を減らしてこなかったという経過があると。それから、過去大北地域の高校に勤務していた経験からすると、都市部、南志向への流れはこの3、40年来変わっていない。今後もそう簡単には変わらないのではないかと思います。

それから、今後について、数をきちんとしないと議論は進まないだろう。大北は残念ながら、企業活動等をみても、地域活力が感じられず、むしろ縮小傾向にある企業もある。従って、数についてはもっと厳しく見る必要があるのではないかというご意見。それから、都市部進学校への流出は、昔も今も、子どもたちのチャレンジ意欲の現れであると。また、大系線沿線は、職業科のウェイトよりも、普通科を増やすべきであるというご意見。廃止となる松本筑摩の全日制普通科3学級分ですが、これを大北地区に持ってきてもいいのではないかと。生徒の流れは今に始まったことではなく、それを踏まえての学級数なり学校数を見るべきである。高校の魅力付けは地についたばかり。ようやく目立ってきた段階であり、時間がかかる。従って来年度からというのは無理がある。当面、連携校としてスタートをし、統合そのものは時間をかけてというようなやり方もあるのではないかとご意見。この問題をどうするかは、目先ではなく、10年先をみる必要がある。その観点からは減らさざるを得ないのではないかとご意見。それから現状の大町4学級、大町北3学級という高校の状況をどうみるかではなく来年からの即、統合というのは無謀ではないか。かといって、将来をみると、4校維持は無理であろうと。それから、大町と北校を統合した場合、今まで北に入学できている子どもたちが、合格水準が上がるということで、全員

が入れなくなってしまうのではないかというご意見。

それから、続いて白馬高校の方向付けということで議論をしました。現状をみると、地域高校としてさえも存続することは困難ではないかという中で、県教委の再編案では存続させてなっていますので、その辺の内容を確認しました。県教委からは、4校のままで存続が難しいのではないかという危機感があると。また、学科転換についても、推進委員として、この中で議論いただいて構わないと。それから、これはまた県教委とは別のご意見になりますが、地元中学の生徒数は、当面小谷30。それから、白馬100のだいたい130人規模で、同規模程度で今後も推移すると思われる。それから白馬では平成20年にインターハイが開催されるというご紹介もありました。それから普通科でも全国募集は可能かという質問に対して、県教委からは、クラブ等の特色が出せれば普通科でもOKであると。それから普通科から学科転換して、例えば観光学科とした場合、教員数の加配の扱いをどうかということで質問がありまして、県教委のご回答は、総合学科と文部科学省が決定した学校の場合には、そのルールによるが、県独自で設定する学科の場合は県で判断することになるという回答でした。

それから地元中学からの進学率からみると、本当に存続させないといけないのかどうかと思ってしまう。むしろ大町エリア等、南から進学してくる子どもたちの進学ニーズを把握することが、白馬高校としての魅力づくりのなんらかのヒントになるのではないかと。もし大町北校の統合により、普通科のウェイトや魅力づけがされれば、むしろ白馬エリアから大町への南下の流れが一層加速され、止めるのが非常に難しくなるのではないかというようなやりとりを前回しております。

それから、足早で恐縮ですが、お手元に、「推進委員限定」となっておりますが、各それぞれの協議会、懇話会等からいただいた要望、ないしは提言についてお配りをしていますので、この推進委員会の中で参考にさせていただきたいと思います。県教委を通じて、それぞれの母体の方に、ここに書いてある内容の具体的な根拠等々、もしご説明があればということで、確認をいただきましたが、この書面以上のものはないというご回答ということで確認をさせていただき、本日は書面での配布とさせていただきました。

今日、配布いただいたばかりですので、私の方から簡単にその内容を確認したいと思いますが、よろしいですか。

それでは時間もありませんので、私と皆さんの順番がずれてはいけませんが、一番下の方に大町北校と書いてある提案一枚、それから、その補足ということでその説明が記載されている、北校の同窓会長さんの名前でもいただいております、そこから参ります。この中で、確認しておくべきは(3)になります。1、2それから4、5については、それぞれ目で追っていただきたいと思います。が、(3)白馬高校と池田工業高校の地域高校としての存続は不安定であり、大町高校と大町北高の選択の幅が非常に狭められる恐れがある、検討を要すると。例えば、大町高校は、地域の進学校として残し、白馬高校と大町北高校を統合する案。それから、池工の電機情報システム科を廃止して、松工の電気科に統合し、他の二つの学科と穂高商業高校と南農を統合して総合学科高校にする案が考えられるという提案が盛り込まれております。

それから、2枚目は特に3についてです。先ほども申しましたような意味合いで、ご質問をして、補足をいただきましたので、それをご参考に願います。

続いて「白馬高校を育てる懇話会」から、両面コピーになっておりますが、これは2枚目を、ページでいきますと表紙を入れて3ページになりますか。右側の(1)から4までのところで具体的な存続についての内容が書かれております。ただ具体的にというところが、残念ながら、少し足りないような気がします。が、(1)として、連携校の中高一貫教育、白馬高校、白馬、小谷中をどう検討するかということ。それから、2として普通科の高校として、スキー部の全国募集をしていくこと。それから、(3)として、生徒達の進学への対応として文理コースの教育課程の見直しをすること。(4)アルプスコースは以前にも増しての地域の方々による社会人講師の協力を得ること、というのが存続させるためのアイデアだということで盛り込まれておりました。

それから、続いて、池工になります。「池田工業高校を育てる懇話会」から枚数が、10枚程度になりますか、いただいております。この中で具体的な魅力付けということになりますが、それについては、ページが要望書の後、ページが1、2とつけられているところがそれに該当しております。読み上げませんが、1、魅力ある池田工業高校づくりについてということで、実施計画の内容は平成17年度より実施準備ということで、デュアルシステムの導入、それからスペシャリストコース、カレッジコースの充実、女子生徒が過ごしやすい学校作り、大学との連携において池工をPRする活動を活発に行う、授業の活性化について、それから、継続的な特定検討内容で、2ページのナンバリングされたページですが、1として介護福祉系の学科の設置要望について、それから2として、くくり募集(ミックスホームルーム)について。それから3として定時制のありかたの検討というところが、関係してくるかということになります。それから最後に大町市の議会議長名で要望書が皆さんのところに配られていますので、それも参考にいただきたいと思います。

この間、11月13日の私どもの委員会で、大北地区4校の意見、提案ということでいただきました。これについては、あがたの森文化会館でやりましたときにご説明をしております。ただ、提言に対する質問もなく、正面からの議論がなかったことは遺憾云々とございますが、我々はそれを踏まえて議論に生かしていく。それから、今日のそれぞれの懇話会等々からのものも踏まえて、委員の皆さん一人一人の検討の中の材料としていただいておりますし、それから、前回、生徒数と学級数をどうみるかについては、傍聴の方々にも資料を配布いただきまして、いただいた提言では27年および、28年だけで切れておりましたが、それについては学校数を決定するためのベースとしてみるべきだということと、それから、大北地区全体が仮に一人も流出せず、このエリアにとどまった場合等々も含めて、一応シミュレーション、以前に委員の皆さんで共有したものを傍聴の方々にもお配りして、ご説明をしておりますので、そういうものも参考にいただければと思います。

ということで、少し時間がたってしまいましたが、第13回の議論に入っていきたいと思っております。お手元に、恒例になりますが検討のポイントということでお配りしておきました。少し長くなりましたが、両面で2枚お配りをさせていただいております。

そこに書いてありますように、例えば、その再編そのものについて、提言にもありましたが学級数を増やして学校数を維持することが本当に可能かどうか、それから将来にわたり、それが本当に子どもたち、もしくはその地域にとって有益かどうか。学級数を増やすということは、パイの大きさは変わらないわけですから、そういう意味では、どこかを増やせば、どこかが減るということに当然なります。それは、白馬というエリアでみようと、

大北というエリアでみようが、第四というエリアでみようが、長野県というエリアでみようが、それは同様です。従って、そこに書いてあるようなところが検討のポイントになるうかと思えますし、それから、前回、白馬の存続可能性について議論をいたしました、それに、前回の議論を踏まえて補足したものをそこに書いてある内容です。

それから、今日も大町北のPTAそれから同窓会名でいただいた提言の中には、大町、大町北の統合とは別に、白馬と大町北の統合という案も出されておりますので、その辺も踏まえて議論したいと思えます。

また、大町、大町北の統合について、(1)の再編案そのものについてとの絡みで言えば、学級数、生徒数を踏まえた上で、2学級を増やしての2校を存続、維持というのは本当に可能かどうかということがポイントになってこようかと思えますし、それから、もし統合ということを議論する際には、数回前、下川委員からご質問がありましたが、再編そのものの中での書き方が、木曽山林の統合と大町、大町北の統合の、ニュアンスというか、形態が違いますので、その辺県教委から必要であれば再説明をいただくとして、その辺の意味合いをどうしていくかということも、必要かと思えます。

それから、これまでも2回の議論の中で出ておりますが、仮に統合した場合の習熟度別コースであるとか、特進コース等の必要性等です。それから、池工については、今日の提言にも入っておりますが、中学2年生ということでもあるようですが、平成15年のものしか使えなかったのも、進学ニーズから、普通科、工業科、商業科等々への進学ニーズを踏まえて、学校のシミュレーションをこれまでして、我々委員会の方で確認をしてきております。そういう中で、工業科のニーズ等をみたときに、第四全体でみたときの工業ニーズからすると、3学級そのものの維持が可能かということと、それから池工については建築科というのが、第四通学区の中では、唯一存在する学科あるということ。

それから、木曽のところでも議論をしましたが、総合学科の結果として、当通学区の場合は、すでに志学館に設置され、何年かたっているわけですが、総合学科が非常に子どもたちのキャリア選択という中で、志望者が増えているという実情を踏まえて、南木曽、県南から通えない、それから県北から通えないという中で、結果的には総合選択制という形を取りましたが、総合学科に近いような意味での多様性を、通学等を踏まえて木曽というエリア、それから場合によりましては、この大北というエリアにも設置することが必要かどうか、こういうことが今日の議論のポイントになるうかと思えます。

前回、白馬で途中で終わったのでということではありませぬので、今言ったところを全体の中で、再編、それから、白馬、大町、池工という順番で、一応ポイントが書いてあります。再編そのものは頭に入れてということになりますが、これからの議論のポイントとして、ひとつは再編案をベースにという意味で、大町、大町北の統合というたたき台としての案があります。それから、もうひとつご提言でいただいている大町北と白馬との統合というか連携、一緒にしたらどうかという提言もあった。それから学級数を増やせば、4校が維持できるのではないかという提言があった。その辺、池工は少しおいておきまして、4校は維持できるのかという意味では当然入ってくるのですが、いったんその具体的な部分は置いておいて、今は4校維持できるのか、できないとすればどういう統合形態、組み合わせが考えられるのか、この辺から議論を煮詰めていきたいと思えます。

できれば、第3回になりますし、それから、冒頭吉江課長の方からお話がありましたが、

まだ、松塩・南安を含めての議論があります。今日は、構いませんが、松塩も残っていますし、それから実施時期については、あえて棚上げしてきていますので、ある程度エリア、エリアの方向付けがされた後、場合によっては個別も含めて、個別に分けてということも含めての進め方をどうするか、実施時期についてどうするかという議論も、一回くらいは必要だと思います。

それから、報告書をまとめていくときの、事務的で申し訳ないのですが、報告書の確認をいただくという回も必要になりますので、できうれば、当然、議論も煮詰めればということになります。今日はこれだけ多くの皆さんがお越しいただいている中で、できるだけ我々として議論を煮詰めて大北地区の方向付けまで持っていければという予定で考えております。

それではちょっと長々と申し上げましたが、今申し上げた観点からぜひご意見をいただければと思います。よろしくお願いします

これだけ皆さん、たぶん 200 席くらいご用意いただいてそれから追加していますので、さらにそれ以上の数になっているかもしれませんが、大北地区の議論ということで、少なくとも3けた以上の方々が、また地元の関係される方々も傍聴いただいているということになります。

他の通学区の、推進委員会の中には、非公開で部会を設置して検討してきたというところもあるように聞いておりますが、我々第四推進委員会としては、ここにいらっしゃる委員の皆さんのご協力、それからご理解をいただいて、一貫して非公開ではなく公開の場で検討して参ってきていますし、それから今後についても、方向付けまで、報告書までも含めて、できれば公開ということで進めていきたいと考えております。

それぞれ皆さん、出身の違いはあるわけですが、そうした利害関係ではなくて、できればそれを離れて、忌憚(きたん)のない意見を言っていただいていたつもりでおりますし、今後もそうした意味での検討を進めていきたいと思ひます。

そういう意味で、背中の目といいますか、横の目といいますか、委員の皆さん、かなり気にされて、プレッシャーもかかっているのかもしれませんが、我々公開でやりますので、具体的な高校名も腹蔵のない意見交換をさせていただきたいと思ひますし、それからできれば白馬がどうか、大町がどうか、池田がどうか、というエリアではなくて、大北全体をどうしていくか、それからひいては、第四全体をどうしていくか、それから私自身も含めて自分の母校に愛着がないという卒業生は誰もいないと思ひます。

過去は大事にするとしても、この中には、未来の高校生も先ほどお見受けしましたので、そうした次代の子どもたちにとって、過去を仮に否定することがあっても、何が一番いいのか、そのことを多少身を切られることも、大北地区からも2名の委員の代表もいただいておりますので、そのような面もあるかもしれませんが、これからは、今まで通り忌憚(きたん)のない、それから腹蔵なく、高校名を挙げてでも、議論をしていきたいと思ひますので、ぜひ、傍聴される方、たくさん来ていただいて、我々としても感謝申し上げますが、できうれば推進委員会そのものは、どの地区も含めて、傍聴される方々のご意見を推進委員会の中で、この場で議論に加わっていただくということにはしておりませんので、すみませんがお聞きいただくということにはなりますが、それを申しました意味合いから、個々の委員の発言について、委員会終了後等を含めて、今後、批判や中傷などないように

ぜひご理解、ご協力をいただきたいと思いますのでよろしくお願いします。

（下川委員）

これだけ大勢の皆さまが集まったということで、非常に魅力ある高校作りという点での、関心が高まってきたということでは、非常にいいことだと思います。

中條委員長さんの説明、報告の中にもありましたが、今回の再編整備という中で、統合のイメージというものが、私も少し理解不足で、ちょっと質問の仕方が悪かったのかもしれませんが、第11区の統合、それから第10区の木曽地方、統廃合の再編整備の中身、それから今回の12区、大北地区の再編案というもののの中で、どういう違いがあるかどうかということも、先ほど委員長さんがおっしゃいましたが、その点、今回、出席されている傍聴者の皆さんも今まで聞かれたことがないことあるかと思いますが、再度説明と、それから、委員会の中で出ていなかったことなのですが、その手順としての流れはわかるのですが、その後の統合のイメージというのが具体的に出されてないと思うのです。仮に今回、再編整備で大町高、大町北高の統合と、たたき台として挙がっているわけです。では具体的にその後のイメージというものはどういうものを出ているかということは、この大北地区の傍聴されている皆さんも、具体的に知らないでしょうし、どういうイメージをしていったらいいのか、そこがわからないものですから、まだ踏み込んだ議論も、なかなかできないという現状があると思いますので、まずそこをご説明なり、お話をいただければいいと思います。

（中條委員長）

いったん、意見を聞いた上で、質問の方に回します。

（宮川委員）

この会議の冒頭に委員長も言われましたが、例えば学級数を大北地区で増やせばそのまま4校の維持ができるのかという話をきちんと煮詰めて、これがなければ、また元に戻るわけですから、本当に増えるものかどうかというのを今まで検討してきましたので、その辺をやっていった方が良いのではないかと思います。

と申しますのは、今までの会議の中では、松本の方に流れてしまう人が多いと。その分が大町に学級数を増やせば戻ってくるのではないかと、ですからこちら（大北）を増やしてという形の議論がありました。

私は、首長の立場ですので、生徒の好みなどはいろいろわかりませんが、今まで事務局にいろいろお伺いした中では、やはり今度の合併問題を踏まえても、松川村から南は松本の方を向いているのではないかと、ということでした。これは、子どものことではありません。そのような地盤があるところで、今後将来それが大町の方を向いて、またそれを学級数を増やしていけるのか、これは大変疑問なところだと思います。ですから、この辺をしっかり含めて、本当にそれが可能であるかどうかということを、地理的にも、教育的にも、子どもたちの魅力にとっても、そこだけ含めておかないと、これはいつまでいっても戻ってくる、戻ってこない、の議論になってしまうので、それから始まって、ではどうしようという話になっていけば、話が進んでいくかなと思います。

(鈴木委員)

また、そもそも論になってしまいますが、この委員会は審議委員会としてということで、最初のところでもって、委員長さんが確認されていたと思います。さらに、最終報告には、部会を開くことができるということになっていて、県の方でも部会を開くことは妨げないという立場であったと思うのですけれども、この委員会では、部会を開くということについては、さまざまな時間的なもの等の問題があるということで、たまたま、この大北には4校連絡協議会、木曽には3校連絡協議会ができていますので、その意見などを聞きながら、地元の声を聞こうという、そういうことだったと思います。その点で言うと、前回、前々回、考える会で出された提言、あるいは今日4校からそれぞれに出されているものがあるのですけれども、これは、我々の立場からいくと、そもそも論から言えば、これはやはり尊重する立場でいくべきではないかと思うのです。

大町市議会の方で出された意見に、考える会が出された「提言」についての議論がなくて遺憾であるという文言があったのですが、そのことに関して言えば、非常に優れた提言であったのではないかと私は考えています。と言いますのはこの大北地区12区について、中学校の卒業生に対して七掛けしか高校の定員がないということについて、我々は、「卵が先か、鶏が先か」という、そういうことでなかなか結論といえますか、理由がわからないなという立場にいたのですが、考える会の方では、中学校での進学指導、中学浪人を出さないための進学指導の中で、南の方へ押しやられている子どもがいて、もしこの地域に2学級規模の募集定員があれば、それは避けられるという分析をしているので、そのことは中学校の進路指導などの情報から得られていることであれば、我々の持っている情報よりも、さらに正確な情報ではないかと思うのです。そういうことで言えば、やはり2学級をこの地域で保証する、定員を保証する、そういう報告があってもいいのではないかと思います。

もちろんそのためには、第四通学区で募集定員を減らさなければいけないところが出てくるわけですが、これは私が何度も言っているように、第11区については、いわゆる標準という言葉でいえば、6を上回る学校がとてもたくさんあるということや、あるいは松本筑摩高校の全日制の募集停止、これをこれから議論していかなければいけない。これも、ちょっと睨みながら言えば、この12区に2学級募集増という方法はあるのではないかと思うのです。というのが、第一の意見です。

もう一点ですが、私は、蘇南高校で、今日はこの話は、傍聴の先生方にも聞いていただきたいところなのですが、木曽は、31年には234という場合によっては6学級規模ですから一校でいいという、そういう人数になるのです。ただ、蘇南高校については、木曽福島まで通うためには、いくら速くても40分は電車でかかるという中で、南木曽町は、さらに奥深くに集落があって、その子たちの学習、教育の機会、これを保証するためには、南部に蘇南高校がやはりあるべきだという立場でいるわけです。ただ、その時に、場合によっては2学級校化は避けられない。そうすると2学級になったときに、果たして地域の子が蘇南に魅力を感じてくれるかどうかという、そういう危機感を私は持っているわけです。

そういう中で、やはりもし2学級になったとしても、地域の生徒の多様なニーズ、多様な学校に対する要望に応えるための学校作りを早くしようではないかという、そういう議

論をしているわけです。そのことで言うと、この地域では、北高の同窓会、PTAには(3)のところで、若干新たな提言はありますが、4つの学校共それぞれ存続を要望されているということだと思うのです。

そのことは、どういうことになるかということ、例えば、北高、大町高校も、先ほど委員長さんが言われたように、3とか4とかいう学級でいくことになるし、白馬高校の場合も2学級、現状ではかなり定員が割れていますから、その定員割れをおこさないというか、あるいは3割しか来ないという白馬中学校の生徒をいかに、白馬高校の魅力、あるいは特色の中で、地域で育てるといふ、そういう視点を持った学校作り、そういうのが、この要望の、両刃の剣になっているなと思います。

ですから、4校がそれぞれやはり決意を持った形でそれぞれのこの地域の教育要望、学習要望に応えるような、場合によってはそれは住み分けということになるかもしれませんが、けれども、そういうことをやる覚悟があつての要望書かなと思うのです。そうだとすれば、やはり尊重していくことが、我々の委員会の立場としては大事ではないかと思います。

従って、池工は3学級、白馬は2学級、大町と大町北は31年のところをにらめば4とか3。516ですから13学級くらいです。13学級ですから5取れば、8ぐらい残るわけですから、4、4ぐらいですか。2学級増やしたとすれば、4とか3ということになる学校として残すという覚悟をした要望であるというふうに受け止めて、報告書にはそういう形で書く必要があるかなと思います。

ただ、前回どなたかが言われましたけれども、白馬高校がこういう状況で「自然死」という言葉が出てきていましたけれども、そういう状況についてはやはり議論をする必要があるのかなと思います。

(中條委員長)

今、お三方からご意見をいただいた中で、発言内容の是非ということではなく、進め方に関して、下川委員の質問は、具体的な内容になったときに、事務局から説明してもらうとして、今の、鈴木委員の意見も含めて、それと宮川委員からもあったように、そもそも論と鈴木委員はおっしゃいましたが、2学級を増やすことで、本当に4校がこのエリアをみたときに、本当に維持できるのかどうか。

冒頭申し上げたように、パイは変わらないわけです。ある日、ある年、突然、100人増える200人増えるということは、50年後、100年後はわかりませんが、県教委が出している平成31年というのは、高校改革プランを検討したプロセスの中で、平成16年に生まれた子どもたちが高校に入学するということで、各エリア、市町村、すでに出生届が出されているわけですから、それをベースに、そのエリアにはどのくらい子どもたちがいてということ、旧通学区ベースに当然計算をしていると。従って間違いなく平成31年までの各年度で、先ほども数字が出ていましたが、その子どもたち以上に入ってくるということはありえないということであると思います。

これまでも我々は12回の推進委員会を進めてきた中で、大北地区というのは、池田、松川の調整区の歴史であるとか、それから、前回も議論の中で出ていた南志向であるとか、といったところがある。仮にそれを関所でも何でもつくって止めた場合に、こういったことが考えられるのかということも、いったん、これも我々、委員会の中でシミュレーショ

ンしました。一人として、旧 12 通学区から一人も流出しなかった場合も、5.5 そのものの議論はあるにせよ、一応計算上それですと、平成 31 年では 2.09 という数字が出てきます。要は、ひとりも大北地区から流出しなくても、2.1 校というのは計算上出てくる数字です。それに対して現状は 4 校。従って今は平成 17 年をベースに、668 名が、大北でみれば 516 名というのが平成 31 年の数字で、それほど減らないのではないかと。それから、この数が全員ではないにせよ、今の状態からみると、流出ということをとらえると、学級数が足りないのではないかというのが提言いただいた内容であり、かつ先ほど、鈴木委員が、そもそも論でというお話でいただいた話になってくるのですが、5.5 ということを仮に踏まえると、もう平成 17 年の段階で、一人も流出しなくても、平成 14 年でみれば 3.2 であり、15 年でみれば 2.9 であり、平成 16 年でみると 3.2 校というのが計算上出てくる数字です。これはあくまでも計算の数字です。

それから我々がこれまで議論してきた中で、当然、小規模校と言いましょ、そういう正式な言葉はないという県教委のお話でしたが、いわゆる地域校、これは通学等を踏まえて、どんなに小さくしたとしても、なんとか維持させていくことが、先ほどもお話があった、どんな場所であれ教育の機会均等を踏まえれば必要であると。それは、我々の議論ではなくて、県教委としての再編案の中で、そうした地域校の重要性ということを踏まえて残すと。我々、第四推進委員会では、鈴木委員がおっしゃったように、それに該当してくるのは、蘇南であり、大北地区の白馬であるということです。これは、なんとか残していこうということを書いていらっしゃるわけです。

そうしたことも踏まえながら、本当にその学級数を仮に増やしたときに、どういったことが予想され、これはそれぞれ推測でしかありませんので、必ずそうなるということではないにせよ、どういったことが予想され、将来に向けたときにどういうことが考えられるのかという意味で、先ほど地域校を、いったんそういった形で位置付けるとしたときに、我々、12 回の議論の中では、子どもたち、特に小学校が 1 学級しかない、中学校が 1 学級しかない、という小、中学校であっても、高校にいったときにはそのままの規模ではなくて、やはり大きくなることによってそれまでのお山の大將が切磋琢磨(せっさたくま)し、いろいろな機会が与えられ、かつある程度の規模の中で、享受できるメリット。それは、単に授業ではない、クラブ活動、部活であったり、学校行事であったり、という意味でいくと、ある程度の規模が必要であるというようなことも、我々は議論してきました。

従って、全く原点に戻るという意味での、「そもそも論」ではなくて、ある程度の規模が限定される、生徒数というのは、平成 31 年まではある程度、もうすでに出ている。それを踏まえて、では流出をどのように止めるか、魅力付けするか、これは個々に進めていく必要が当然あるわけですが、大北から南安曇まで、ある程度視野に入れながらも、このエリアについて、学級数と先ほど宮川委員がおっしゃった学校数というところをクリアにしないと、いつまでたっても、そもそも論にまた戻ってしまうのかなという気がしないでもありません。

逆に、その学級数を増やせば、4 校が維持できるという認識、結論付け議論ができれば当然そういう方向性も考えられるということだと思います。そういうことで、今、お三方からいただいた意味合いでいけば、今、申し上げたところをいったん整理させていただいた上で、その方向付けにおいて、その次の議論をどう進めるかに持っていきたいと思いま

す。下川委員の質問は、その後のところで、もう一度、我々としても、事務局の方に確認をしたいと思います。ということでご意見をいただければ。いかがでしょうか。

（百瀬副委員長）

私、前回のときにも、この地区にかつて住まわせていただいた、こういった経験から発言をさせていただきました。

今日、新たにいくつかのご要望やご意見等をいただく中で、そして前回いただいたこの地区の連絡協議会の要望書、こういうものもあらためて見させていただく中で、ひとつ気になることがございます。

ひとつは、連絡協議会の立場では、4校存続という形での提言が出されているわけですが、今日いただいた中では、例えば大町北の同窓会から出ておりますのでは、その辺はなかなか危惧（きぐ）される部分もあるというような立場で、北高と白馬高の統合の問題、あるいは池工と大町高と白馬との絡みと、こういうご提言もあるということでもありますので、ちょっとその辺が、4校存続させるという立場というものが、本当に、この地域の皆さんの集約的なご意見なのかどうかということが、気にかかるところであります。

もうひとつは、やはり今日いただいた、大町市議会議長さんの名前でいただきました資料の、ページが打っていないのですが、3ページの真ん中のところに、「現状が大町高校5学級、大町北高校4学級であったとしたならば統合という発想にはならなかったのではなか」と、こういう文言もございますが、大町高校が5学級になったのは平成8年です。それから大町北校が4学級になったのが平成7年です。これは第7回の委員会のときに事務局からいただいた資料にもありますが、第12区の高等学校の募集定員と入学者数の推移、という平成元年度から平成17年度までの推移を示す資料でありますけれども、私、実は勤めさせていただいたのは、平成3年から平成7年までの5年間、大町高校に勤めさせていただいたわけであります。

その間は、ほとんど大町高校では学級数の増減はなかったわけであります。大町北高校では、平成3年のときが6学級、平成4年から6年まで5学級、平成7年から4学級と、こういう形で学級減になってきているわけですが、その間にいわゆる学級増というような形での、この大北地区の中学生の受け皿としての高等学校の募集定員、これを確保するという、そういう意味でそういう学級増というそういった要望、そのようなものがどの程度の、そのような動きがあったのか。私、平成3年から7年まで大町高校にいましたものですから、北高の方の状況については、実はほとんど承知していないという状況でありますので、そういった北高が、特に学級減というような状況にあったときに、この地域全体として、そういった学級減ということは好ましくないというような、そういった声がどの程度だったのかというのが、ちょっと気になるわけです。

というのは現在こういった形で、高校再編というようなことで、いわば尻に火がついたような、そういった状況の中にありますので、大変そういう点で関心も強いものになってきていると、これは私も理解できるわけですが、将来的にこういった状況、統合というのは、話題になる、そういったことが見越され、見通されるというような状況もあったように思うわけです。

私が在職していた時期にも職員の中で、将来的には、当時から現在までほとんど変わら

ない生徒の動きといいますか、志望状況、こういったものがあるならば、なかなか大町高校と大町北高の2校を維持していくということは難しくなるのではないかと、このようなことが実はささやかれては参ったと、こういったようなことがあるものですから、ぜひその辺のところもこの地域の声といいますか、動きといいますか、そのようなものをお聞かせいただければありがたいと。これは教育委員会の事務局で、そんなことをつかんでいらっしゃればですけども。そのようなことを思ったものですから話させていただきました。

（中條委員長）

直接的に書いてあるかどうかわかりませんが、過去の経過等々、もし記憶等ございましたら、事務局お願いします。

（吉江高校教育課長）

今の、百瀬委員さんからのご質問に対してお答えしたいと思います、いわゆる定数、募集定員を決めるのは、かねてから申し上げておりますように、教育委員会の定例会にかけて決定させていただいております。募集定員を決めるにあたりまして、毎年度、教育7団体という団体がございまして、これは主に義務教育の関係のPTAとか、あるいは義務の学校の関係者により構成される組織です。

その教育7団体が陳情等にみえる場合がございます。それで、教育7団体の陳情の中で、基本的にご要請いただくものは、減る可能性のある地域において、ぜひ今年度の募集定員を維持してほしい、ぜひ減らさないでほしい、あるいは来年度入学者数が80人減るところを、ぜひ1クラス減程度に、非常に狭めてほしいというようなご要望をちょうだいしているのが実際のところでございます。

それと加えまして、今、百瀬委員さんもお話ございましたように、ある1通学区のみはこの通学区の募集定員が、そもそもタイトだというようなお話を伺ったところがございますが、それはこの地域ということではないということで私は認識しておりまして、そういう意味では従来から、この12通学区におきまして、11通学区との関係の議論が必ずしもなされていたということは、私どももいたしましては、認識していないということでございます。

（中條委員長）

要望レベルでは、その学校のあたりということではよろしいですか。要望レベルでは、具体的に、大町ないしは大町北、もしくはその池工、白馬等なども含めてこの大北地区からの、ご要望はなかったということでしょうか。記憶はございますか。

（吉江高校教育課長）

いずれにしても、いわゆる、この地域の募集定員がタイトなので、この地域をそもそも入学者の増減によってではなく、それ以上に増やしてほしいとか、そういうような意図としての要望という意味で考えますと、そのような要望があったというような認識はしておりません。

(中條委員長)

要望がなかったから、そういう声がなかったということはないかもしれませんが、ただ、具体的な動きなり、活動としては、県教委へは出ていなかったようです。ほかにご意見ございますか。

(藤本委員)

今、募集定員が先か、それとも魅力づくりといいますが、なんといえいいでしょうか。募集定員があれば生徒がくるかと、あるいはその募集定員がどういうふうに決まるのかなと、いうところまでの議論かなと思うのですが、学校を預かる立場として、魅力づくりが一番大事だと私が思っているのは、「一次募集で埋まる」ということなのです。一次募集で埋まって二次募集はしたくない。ある学校を落ちてきた生徒というのは本当はその学校へ、行きたくなかったのです。そういう生徒はできたら避けたい。最初からその学校を望んで来る人にきてほしいと、そういった意味で私は募集定員というものがあると思っています。

もうひとつは、募集定員が多くて定員が空くと、あの学校は勉強しなくても入れる、あそこはいくらでも、何やっても入れると。これでは魅力ある学校づくりはできないのです。そういったことを具体的に考えていただきたいと思います。以上です。

(小口委員)

前々回のところでやったと思いますが、あるいは前回、発表していただいた団体の資料の中と、県教委との見解と多少ギャップがあるように思いますので、本当にクラスを増やしたら、生徒が地元定数までいっていただけるのかという点を、県教委の分析結果として、先ほど中條委員長がだいぶ、触れていましたが、そうしていただくべきかなという気がします。

白馬高校が減ってしまうと、また地域の流れも変わってくるのでありましょうし、本当に松本方面あるいは安曇野市に行っている方の、回帰現象がおきるのかどうかを、おそらく県教委もシミュレーションしてこの大北地域を出したはずですので、その辺をまだいっていないところが多分にあると思いますのでお願いしたいと思います。

それから、おととい市長会があったのですが、諏訪地域は、ほかの伊那や飯田ばかり 1 校減という政治的な見解もあったのですが、岡谷南と岡谷東ですか、統合する案を出したと。勇気ある決断、提案であったと思います。

そうした、数値的なシミュレーションの中で、県教委が存続できると案を出しているところに対して、無謀にも生徒がいるのに、減らすとは何事だというのは当然の議論だと思います。諏訪広域連合の名前で、第三検討委員会に対して、論理的ではなくて横暴ではないかというような抗議文が、出たように聞いたものですから、その辺の数値的なことを、お願いできればと思います。

(中條委員長)

補足といいますが、付け加えると、9月18日の皆さんの議事録の確認が、いっていると思いますが、あのときも大北でした。あのときに、小口市長の方から仮に学級増をしたときに、それは具体校名ではなく、このエリアでという意味でいったのですが、どういう意見が予想されるか、想定されるかというやりとりを県教委から答弁されていますので、その辺も含めて、どなたかよければと思います。

(柳澤教育主幹)

今、中條委員長さんからお話ございまして、前回も同じようなことがございましたが、募集定員につきましては、それぞれの通学区、旧通学区ごとに、生徒のこれまでの動向等、さまざまな観点から、毎年決定をしていくということでございます。そして、先ほどの百瀬委員さんの方からもお話がございました通り、大町、大町北、かつては7学級それぞれあったわけですが、生徒の減少に伴って学級減ということをしてきたということでございます。これは大町、大町北に限らずでございますが、そういう学級減をしていく課程での生徒の希望の動向、流入等を含めまして、勘案して決めているということでございますので、これはこの経験値といいますが、この流れの中で決めているというのは、かなり生徒のニーズを、十分把握した上での決定と考えております。従って、ここを直ちに学級を増にいたしましても、なかなか、先ほどもちょっとお話がございましたが、募集定員が満たされるかどうかということは懸念されるところであります。

また、この第12区、先ほど、いわゆる旧通学区ごとに募集定員を決めるといいたけれども、この旧第12通学区で見ましても、過去6年、7年間のところをとってみましても、充足率でみましても、100%にいておらず94%ぐらいという段階にとどまっていますことから、ここの募集定員を拡大して、直ちにそれが満たされるかというのは、はなはだ疑問を感じるというところでございます。

(吉江高校教育課長)

加えて、ちょっとお話を申し上げたいと思っておりますが、平成15年度までは、皆さんもご存じのように12通学区制でございました。それで、12通学区制の折に、先ほども委員長さんの方からもお話がございましたように、当時こちらの方では、池田町立の高瀬中学校と松川村立の松川中学校が、11区にもいけるという位置付けでの、いわゆる調整校でもあったわけです。

16年度から30年ぶりに、大通学区制に移行いたしまして、現在に至っているわけですが、過日の資料でもお示したように、例えばの話が、高瀬の場合は、約52%が11区に出ています。松川の場合も、55.4%が11区に出ているというような現状でございまして、これはある意味では、従来からの調整区という位置付け、さらには、そのものを大通学区に移行してから、やはり大系線沿線でのひとつの大きな流れだと考えております。

過日の、またご覧いただきますとおわかりのように、基本的にこの大系線自体を、信濃大町というところでの、ひとつのダイヤの動き、それからさらには南小谷までのダイヤの動き、正直申し上げてそれよりも以北につきましては、JRの西日本とJRの東日本との分断の動きと、そういうようなものの中で、動きとすれば非常に11区に、行きやすい地域

にこの地域は存在しているように考えております。

さらに申し上げますと、今のお話にもありましたように、全体でも例えば90何%の充足率に対しまして、やはり、たまたまそれが小さい学校だけの影響ではなくて、過去におきまして、見ていきまして、例えば、今話題の2校につきましても、100%の充足に満たない時期があったり、あるいは先ほど藤本委員さんの方からも、お話がございましたように、1回の試験では充足しなかったというようなことも、あったということも申し添えたいと思っております。

（中條委員長）

一応、それを紹介した9月18日のやりとりを少しご紹介しておきますと、確かその時の吉江課長の答弁の内容は、人気校という言い方はされませんでした。ある特定校への集中が懸念されるということと、大北ではなくて第四という広いエリアで見たときに、先ほども南安曇も含めて、これまでも公立と私立のウェイトを県教委として、連絡協議会等々と踏まえながら決めてきているのですが、これは、生徒数が増えたときの、公立と私立がある程度、連携しながら増やしてきた。逆に、減るときも同じようなことを考えていくということで、中には、校舎とか施設をその時点で、私立等も対応しながらやってきたところもあって、そういう意味で長野県は、第四に限りませんが、公私、公立と私立がある程度、協力、連携しながらやってきた。

従って、私立へ、もし仮に、大町、大町北というのではなくて、代案として見たときに、公立の学級数を増やしたときに、私立にかなりの影響が出るというようなことは、県としてできるだけ避けたいと、2点の説明はありましたので、ご紹介をしておきます。

（鈴木委員）

先ほどの百瀬委員の質問というのは、ちょっと意地悪ではないかなと思うのです。というのは、私、職員団体の中で、地域校連絡会という - 地域高校の県下21校を一応対象にしているのですが - 会があるのです。そういう中で、地教委であるとか、あるいは市町村の方々は、「県立高校なのだから、やはり物はいえないな」という、そういう気持ちが強いのです。そういう中で急変期にさしかかった、急変期の中で、地域の学校を守るためにどうするかというときに、確かに県立高校ではあるけれども、地域の自治体などが、例えば援助をし、あるいは要望を出してなんとか充実させようという思いでやってきているのです。

そういうことでいうと、確かに今ここで統廃合という案が出たので、突然にぎやかになっているのかもしれないけれども、それというのは、やはり県立高校については、県がやることだからということで、多くの場合は市町村が口を閉ざしているというのは、今までもあったと思うのです。だから、それはちょっと意地悪ではないかなというのは思うのです。今、この段階になって、よくよく見たら、7掛けしかない募集定員でいいのかという、こういう問題意識が生まれたというのは、我々からすれば十分受け止める必要があるのではないかなと思うのです。

それと、第1回目のときに配られたものなのですが、いわゆる、前期選抜と後期選抜の志願者状況です。例えば大町高校の普通科は、松本の都市部並みの、前期については、3.58倍あるのです。確かに募集定員の2割ということですから、少し、そういう面でいうと、

入り口が狭くなっているということもあろうかと思うのですけれども、24 人に対して 86 人が志願しています。理数科についても、1.1 倍。大町北の前期にしてみても 1.46 倍という、こういう高い募集定員があって、それでやっぱりだめだったということで、後期に回るということになるのですけれども、それでも大町は 1.08 倍。大町北校は 1.18 倍というのがあるのです。

それと、先ほどちょっといったことと繰り返しになりますけれども、考える会の提言にあったように、中学校では、進路指導についてはかなりのデータを持っていて、例えば 5 教科について、このぐらいの点がなければ、変な話ですけれども大町高校には入れないとか、そういう資料を持っていて、それは過去のデータなのです。そのデータというのは、長期にわたる 7 掛けの募集定員に対するデータなのです。

提言の中で、素晴らしいという話を私はしたのですが、例えば、地域をもり立てるためには、地域の学校で高校生活を送ったかどうかというのは、ひとつの基本だというような文言がありました。たとえ、それが地域外に就職したとしても、県外に就職したとしても、あるいは進学したとしても、その地域の高校に学んだ生徒というのは、いずれ地域の力になるのだという言葉が、確か提言にあったかと思うのですが、これも、非常に大事なことで、確かに、一定の南志向があるにしても、それを全部この地区で抱えろというのを、私はいっているのではなくて、50 人くらいが松本市内の進学校に行っている。私の計算では 46 人ですけれども。それを全部大町で引き受けると、そういう意味ではなくて、今までの長年で培われた、7 掛けの中学校における進路指導、いろいろなデータに基づいた進路指導で、出ざるを得なかった状況にこの地域はあるのではないかとということで、それをここで議論していかないと、10 年、15 年先も同じような状況で、何万円もかけて市内に行かなければならないという、そういう子どもが、この地域にはずっとこの先も出てしまうのではないかとということなのです。

だから、募集定員を割ったこともあったという話があった、それはそうだと思うのです。あと、前期が終わって、後期の定員枠が何名しかいない。よく理数科、英語科で割れるでしょう。あれというのは、例えば、残り 4 人しかいない。4 人のところへ行行って、もし落ちたらどうするのだということで定員を割るわけです。その特色学科、英語科や理数科が人気がないというわけではないのです。そのことが同じ事であり得るとおもうのです。だから、それをもって、この地域は募集定員は十分足りているというのは、乱暴かなと思います。

（中條委員長）

質問ですが、先ほど、吉江課長ご紹介いただいたように、平成 15 年までは 12 通学区制でありました。それまでは、池田町と松川村の高瀬中、松川中の 2 中学は調整区ということで、北へも行ければ南にも行ける。逆にいうと、それを除くと、パーセンテージ条項というのが確かりました。あれは枠外であると、行けないという時代がずっと続いたわけですね。それが、取り払われて、いわゆる第四となった以降、急激に、いわゆる南志向という言葉が、適当かどうかは別として、旧第 12 通学区から 11 通学区への流出が始まったのであれば、その学級の割合、学級数といいますか、そのその配分の問題は、確かにいわれたようなこともあるのかなと思いますが、それは 12 通学区制のときから、高瀬、松川を除いた時代も流出は今ほどないにしても、生徒数が減り、その結果、倍率が少しずつ落

ちてくる中で、結果学級数を、ある時期から減らしてこらざるを得なかったと、いう意味でいくと、それは、今後もそれほど大きく変わる現象ではないのかなと、いう素朴な質問なのですが、その辺のデータがなければイメージで結構ですが、いかがなのでしょう。

（吉江高校教育課長）

今お話がございましたように、平成 15 年度の最終年度は 20%の条項と、パーセント条項という言い方をしたのですが、平成 14 年までは 10%の上限を設けて、受け入れたというやり方をしているのに対して、15 年度は 16 年度からの大通学区制への移行の前の年だということで、20%認めた経過がございました。

実は、今、委員長さんがお尋ねの部分の、平成 15 年度との対比のデータを、ちょっと手元に持ってきていないのですが、ただ私の記憶の限りで申し上げますと、県全体の中で大きく動きましたのが、実のところ第 11 通学区から第 7 通学区への、出入りが結構大きくなりました。15 年度から 16 年度の対比。不思議に思ったのですが、よく考えてみますと、昭和 49 年から、12 通学区制に移行したわけですが、その時期には、塩嶺トンネルが開いていなかった。その塩嶺トンネルが開いたことによりまして、いわゆる松本、塩尻地区から岡谷、諏訪地区への出入りが、非常にしやすくなって、それが今まではパーセント条項の壁があったのが、16 年度に取り払われたということから、そこでの出入りが大きくなったという記憶がございしますが、11 通学区と 12 通学区との出入りというのは、あまり大きな動きはなかったと、というような記憶をしております。

また、16 と 17 の数字について申し上げますと、16 と 17 が、流出入差が 103 と 93 ということでございます。やはり、大きな変化はございませんので、それを考えれば傾向としては、似たような傾向に推移していると考える次第でございます。

（百瀬副委員長）

鈴木委員さんから、意地悪だといわれたものですから、ちょっと私もそういうつもりはないということは申し上げさせていただいて、よろしいでしょうか。

私が申し上げたのは、たまたま市議会議長さん名の文書の中に、こういう分析があって 4 学級まで下がっていったという分析があったということ、引き合いに出したわけでございます。大町市議会さんが、今までどうしたとか、そういうことをいうつもりで申し上げたわけではございません。

もちろん、教育 7 団体には、議会は入っておりませんし、先ほど吉江課長さんから、お答えいただいた形での、いわゆる教育 7 団体の活動ということはあるわけでございますので、その点を一言申し述べさせていただきたいと思いました。

（中條委員長）

皆さん、わかっていらっしゃると思います。

少し議論を、まとめるというとおかしいですが、鈴木委員の言葉を借りると「そもそも論」として、今ここだけではありません。第四という、もしくは長野県全体、学校数をどうすれば維持できるかということだけを、我々は議論しているわけではないと理解しています。

子どもたちのために、どういう学校規模が必要で、それに伴ってどういう魅力づけが、子どもたちに提供できるのか、それは、今日明日もしくは5年先がどうではなく、たぶん平成31年をみたときには、今の学校数でも、規模だけで見れば、平成31年ではまだ多すぎるというのが、数字上は出てきてしまう状況です。

そうしたことを踏まえながら、維持することが本当にいいのかどうか。それは、やはり自分たちの子どもは、もう高校を出てしまっているか、出ようとしています、これから入る子どもたち、もしくはもう子どもさんがいらっしゃるなくても、その地域にいる子どもたちにとって、どうすればいいのかというのを、我々は議論する必要がある。

従って、今日の議題でいえば、4校維持することが、それにつながるのであれば、我々がそういう認識、もしくは自信を持てるのであればそうすればいいし、いやそうではないのだということであれば、やはり、そういうことを我々は、考える必要がある。それがまず第一点です。

それから、具体論で申し訳ないのですが、私が一番個人的に心配しているのは、いきなり各論からで申し訳ないですが、2学級、仮に大町エリアで増やしたときに、一番影響が出るのが白馬ではないかと思うのです。それは、なぜかというと、公立高校への入学数です。実際の卒業生徒数は、ずれていくかと思いますが、これ平成16年でいいですかね、以前委員会でいただいた資料を、ベースに申し上げますと、白馬は76名の公立高校への進学者のうち、70名がいわゆる旧12通学区の高校に進学しています。内、白馬高校へ31名ですね。36名は大町、大町北への進学数です。それから小谷中学は、28名の卒業者の内24名が12区の高校に進学していて、白馬には11名です。大町、大町北にはちょうど10名です。

一方、白馬、小谷だけではなく、これも同じ年度だと思いますが、12区の私立に通っている子どもたちというのは、当然、私立だと松本以南になってしまいますから、遠いということもあって、12区、もし違っていたら訂正をお願いしますが、36名だけです。白馬が4名、小谷は0になっております。この中で一番多いのは第一中学、仁科台中学が11、10ということですが、それ以外は、私立はいない。

それから、各12区の中学校で見たときに、普通科で見たときにです、一番たくさん11区の学校へ進学しているのは、45名が豊科高校へ進学をしています。このうち高瀬と松川で27名ですので、半分以上は、6割近くは、昔でいういわゆる調整区であった高瀬、松川が豊科に行くという。これを含めた45名というのが、12区で単一高校でみた、12区から11区の公立高校、普通高校でみたときの一番多い進学先です。それで、専門校まで入れると、穂高商業がこの時点では54名ということで、数は豊科を上回りますが、高瀬、松川で23名です。54の内23が、穂高商業へいっています。

従って、ひとつは、先ほど申し上げたように、学級数を増やすときに、パイが変わらないのであれば、どこかが増えればどこかが減ることしか、個人的には予測できないのですが、その時に可能性があるのは、もしかしたら、豊科に行っている子どもたちが、大町、大町北で進学できるようになるかもしれない。一方、白馬の子どもたちは、もしかしたら白馬に行かずに、北や大町へもっと行くのかもしれない。その流れを、この数だけでみると、想定できるような気がしています。ということで、いったん休憩をはさみたいと思いますが、先ほどいった将来を踏まえて、本当に何のためにどうするかということ

を、踏まえてもう一度、議論を休憩後に再開をしたいと思います。

【休憩後再開】

(中條委員長)

それでは、委員全員そろいましたので再開いたします。

先ほどいいましたように、将来に向けてどうするのが一番いいのかを前提に、それからもうひとつ付け加えさせていただくと、「統合することが悪である」と、いうことをおっしゃられる方もいますが、統合するメリットというのが、やはりあると思います。統合すればしたで、それをどう生かすかということも踏まえながら、統合することが、すべて否定につながるようなことであっては決していけないし、これまで我々が確認をしてきた、学級集団なり、学年集団という言い方はないかもしれませんが、規模の必要性、ある程度の規模が必要である。ただし地域校に関しては、小規模校化、やむを得ざる小規模校化の中でも、そこは通学上維持していくことは必要だという認識の上に立って、議論をされてきていますので、その辺を我々は頭というか念頭に置いて、議論していきたいと思います。それでは時間も限られていますので、議論に戻ります。ご意見をお願いいたします。

(小山委員)

すみません。繰り返しになるかもしれませんが、学級数について前回も出たんですが、大北地区の募集定員が、卒業者数の割合より低いという理由を、もう一度確認だけしておきたいと思いますが。

(中條委員)

県教委ということでもいいですね。ではお願いします。

(篠原教育幹)

それでは、再度、先ほどの話は何点かありましたが、募集学級数、この地区の策定についてお願いいたします。

いわゆる基本になるのは、中学卒業数があくまでも基本であります。この中学卒業者数が、これが分かりやすいのが、例えば40で増減するというふうな形になりますと、クラスというものは、はっきりと1クラス増減という形で、出てくるわけですが、なかなかそういうきちとした数字には、ならないわけであります。しかしこれまでの、この地区の先ほども資料として出ました、平成元年から平成17年まで、いわゆる4校の募集学級数、募集定員の動き、それに対する入学者数、こういったものを過去にさかのぼって、いわゆる流れの中で推定していくというのは、私どもの基本的な募集定員の決定の仕方でございます。

この地区でちょっと違う数字で、若干申し上げておきたいと思います。10月7日に実施して、11月1日に報道発表になりました、第1回の希望調査の結果でございます。この地区は、中学卒業者数が平成18年度は33名の減ですが、募集定員は平成17年度と同じ480名という数字になっております。そうした中で数字を見てみますと、本来いわゆる表現が、

適当かどうか分かりませんが、松本方面へ出るというものが、逆流するということであるとするならば、マイナス 33 が減って、なおかつ募集定員が同じであると。同じであるということであれば、もう少し第 1 回の予定数調査でも、この地区が増えてもいいだろうという推測は、成り立つわけですが、実際問題、この地区、昨年と比べて第 1 回予定数調査では減っております。

どのくらいになっているかといいますと、4 校合わせますと募集定員が 480 名の内、前期が 331 名、それから後期が 414 名です。実際に前期選抜を受けた諸君、これが丸ごと 100% 後期選抜、この地区を受けるということは、断定はできないわけではありますが、しかし前期 331 名希望した、この希望者がほぼ後期も希望しているということは 100%ではないにしろ、いえることであります。このように考えていきますと、前期 331、後期 414 を足しますと 745 です。大体これを 2 で割ったもの、あるいは 480 を 2 倍してそれと比べると、いうことの数字の推定が、かなり妥当性を帯びた推定になるということでございます。そうしますと募集定員 480 名で、果たして最終的にすべて 4 校の募集定員が埋まるかどうかというところは、これは微妙な数字であるというふうに考えられるところでございます。

実際問題としてこれまでも、いわゆる空き定員、これが数字で申し上げますと、20 から 30 といったところで推計してきておりますので、そういったことを考えますと、やはり募集定員を、例えばクラスを 1 増やした、2 増やしたということで、即それがこの地区にとどまる、つまり逆流が防げるということには、なかなか自信を持って私のほうも策定するときに、考えることができなかったという理由でございます。以上です。

(中條委員長)

今のご説明で、小山委員よろしいですか。

多分シミュレーションに使った数値でいうと、第 10 区が 0.994 という充足率といったらいけないですかね、学級数に対する定員比率ですかね。それに対して 11 区が、私立の影響もあって 0.681、12 区が 0.733 という数字でして、従って卒業生のうち、先ほども出ていた 7 掛けというのが、そのベースになっているわけですが、これはこれまでの時系列の中で見たと、今のご説明でよろしいということでしょうか。

(丸山委員)

お願いします。

先ほど委員長もおっしゃいましたが、学校 4 校維持のことで、この前も私、発言いたしました、ひとつ心配なのは、白馬高校の存在であります。というのは、我々全員の認識として、地域高校があるということは、その地域の活性化につながるということを、みんな共通で認識しているわけです。もう一点共通で認識しているのは、学校規模は最低でも 2 学級、このことを共通認識して魅力ある学校と学校規模ということで、ずっと議論してきたわけです。先ほどの話の中に例えば大町地区の学級増ということは、委員長さんの話と重なりますけれども、大町地区から昨年白馬に 20 名、子どもが通っているわけでその生徒が減ることです。

それから逆に容量が大きくなりますので、白馬から大町方面へ出て行く生徒が増える、そういう心配が一番あるわけです。それから地域高校というのは、やはりその地域の地区

の生徒が、できれば半分は行っている、3割というのは、ちょっと言葉はきついですが、地域高校としてやはり、もう一度魅力づくりというのを、考えていかなければいけない数字だと思うんです。

そんな面で、どうやったら、例えば白馬高校の魅力づけができるのか、そこがうまくできないとしたら、やはりここの白馬高校の存続というのを、もう一度考えてみないといけないと思います。

そういう面で地域高校のそのこのところを、やはり議論するところからもう一度、この地区また安曇まで含めてですけれど、学校の数というところへ絞り込む必要があります。

（中條委員長）

先走ってはいけないのですが、白馬を何とか存続させるという前提に立ったときに、大町エリアの学級増というのは、好ましくないという理解だと、先走りすぎですか。いいですか。はい。ほかにご意見ございますか。

（小林委員）

今まで出ているご意見と、同じようなことになると思いますが、申し上げたいと思います。今、地域校を育てるということで、白馬高校という話がございましたが、やはり私もそれについては、地域高校を大事にさせたいということから、存続という考えであります。

それからもうひとつは、大町高校の件ですが、この件については2学級増という話が出ておりますが、これについては、第4通学区の学級数の推移からみていくと、段々と減っているわけです。その中で2学級増ということは、ちょっと難しいかなということを思います。ただその条件として、提言されているのでみていきますと、「南志向」という言葉がでておりますが、そちらのほうということをいっております。実際に勤めていただく先生や、今までの動向からみていくと、どうしてもその傾向が強いという、そのようなことから、ある面では現状維持というか、2学級増やすということは、難しいかなとそのようなことを思います。

それからもうひとつは、細かなことになりますが、地元高校への進学を強く望んでいる保護者や、それから生徒が非常に強く望んでいると、いうようなことがいわれているわけですが、その実態というか、もう少し現在の小学生までは無理かもしれないけれども、中学校1年、2年、あるいは小学校でいえば5年、6年あたりになりますか、高学年になるとありますが、どのような考えを持っているのか、あるいは家庭のほうも、少し細かな何か実態があればいいかなと、そのようなことをひとつ思いました。以上です。

（藤本委員）

今、学級数のことが、問題になっていますが、私は、規制緩和といいますが、そういった時代で、自由に生徒が望んで行けるという今の中で、魅力づくりを持って、その高校を建て直すというか、そうやって生徒を引き付けるということが大切と思っています。そういった生徒は自己責任で自分で行くわけです。そうするとその学校で頑張ると私は思います。

ひとつだけ例を挙げさせていただきたいのですが、平成元年、2年あたりの、一番の第2

次のベビーブームの急増期のときに、私は地域高校にいました。そのときにその地域高校は、8学級あったのですが、今はもうそんなにありません。それは都市部校の学級数を増やせないから、地域高校を増やしたということを、私は遠くから見たとき感じました。大変学校が荒れた時代でした。大勢の生徒が退学していきました。私がクラスを持ったときに、「学校は勉強するところだぞ、この学校へ来たんじゃないか。学校を選んで来たんじゃないか」というふうに言って「勉強しろ」と、この学校のルールに従うべきだと、いうことを話したときに、その生徒は「別に来たくて来たわけじゃない、行くところなくて来たんだ」と。そういう状況の中で、学校の中で高校生活を一生懸命やろうと、ということにはならないと私は思いました。

従ってまず魅力づくりがあって、そこで学級数というのが自然に決まると私は思います。また、地元占有率ということ、私たちはすごく考えました。問題を起こす生徒は、こう言うのはなんですけれども、都市部から来る生徒なんです。従って地元占有率をどれくらい高めるかということが、地元の学校を魅力あるものにすると、いうように私は考えたのを覚えている。そうでないと、高校が地域の迷惑施設になっちゃうと、高校が地域の皆さんに迷惑かけてしまうと、そういうことを非常に私は心配したのを、覚えているわけがあります。以上でございます。

（中條委員長）

再確認ですが、冒頭から、学級増をそれに関して4校維持。我々としても大選択を踏まえながら将来どうやっていくかを、ある程度方向付けしないと、次の議論に行けないだろうというご意見を踏まえて、今まで進めてきております。

それに対して、さらに追加、補足等、ご意見等ある委員さんいらっしゃいますか。

（宮川委員）

確認をいたしたいのですが、例えば今この議論では、2学級を増やすことは無理だと、それで4校存続ということはあり得ないということなのか、それとも、いや、まだ議論の最中だよというのか、分かりません。ただ私は2学級を増やすのは無理ではないかと思っております。今のままの学級数ではどうかと。そうすると先ほど、統合がいいか、悪いかという話が委員長から出ました。

私どもの木曽では、木曽東高校と木曽西高校が統合しております。かなりの学級数があったわけですが、何年か前に統合いたしました。今、その高校が魅力ある学校として、私の町から1時間近くかかるのに、行く子どもがたくさんおります。そういう形で一生懸命羽ばたいているわけで、そうすると昔の2校でも魅力はあったかもしれませんが、なお以上の魅力を持って、存続しているところもあるということは、ですから今後の議論は、今、毎年30人定数が足りない、その場合学校がふたつになれば、ひとつは増えるわけですね。要するに定数が穴埋めができるわけです。そういう形での合併もあり得ることも視野に入れて、ひとつそういう議論でお話をしていけないと、それが駄目、いいは、別としまして、もう2学級を増やすということについて、ここでは結論を出していったほうが、いいのではないかと思います。

(中條委員長)

ありがとうございました。今の宮川委員の話を補足します。補足しますという意味は、これまで我々12回の議論の中で、何度も何度も関係者の委員さん、もしくは県教委からのご説明をいただいた内容ですが、これほどの傍聴の方が、これまで10何回の中で来ていただいた回は、一度もなかったので、初めて聞いていただく方もいらっしゃると思いますので、繰り返しになりますが、ご紹介をしたいと思います。

今、お話がありましたように、82年でしたか、旧木曽西高校それから旧木曽東高校が、長野県立高校として唯一の統合事例というのが行なわれています。これは今申し上げたように、第4通学区でも、もちろん唯一ですし、長野県全体をみても統合されたというのは、これまで木曽高校の事例しかないということです。

これは当時、男子校、女子校ではなくても、木曽西は共学になっていましたよね、多分。それぞれ男子校、女子校という歴史経過を踏まえながら、当然当時も反対があったと聞いています。ただ実際の統合までには、5年という月日を掛けて、いろんな準備委員会を立ち上げ、それから生徒たちも、生徒会なり、学校行事を一緒にやるためにどうするかということをやってきたそうです。その背景は、新校舎を小丸の丘に新校舎を、建設をしてということの、準備期間が必要だったということもあって、結果的に5年を有したと。

今、宮川委員からお話があったように、西にしても、東にしても当然普通科であったわけですが、予備校と提携しているのですかね。衛生通信等でサテライト授業、これについては、県だけではなく同窓会なり地元が協力して、と、木曽高で聞いた記憶がありますが、協力をして、数字だけでものをいってはいけなかもしれませんが、進学というところに力を入れて、結果として正直、私もこの役目をいただいたものですから、進学状況、進路状況等を含めて、ホームページあるところは、第4通学区の20校ありますか、ないところは見られませんでした、全部見ました。

正直申し上げて、木曽高校は現在4学級です。1学級は理数科で、大町高校にも理数科が1学級ありますね。ということで4学級同士になりますが、見られる範囲で見た中では、単純に大学名で言うてはいけないということは承知しつつも、進学状況は多分大町よりは木曽高のほうが、ある意味頑張っているというのが正直な感想です。

そうした地元なり、子どもたちなり、先生方のそうした、いかにひとつになって頑張るかということやって、今日の木曽高があると。ただその木曽高も、我々としては、特に木曽谷の減少率が、先ほど申し上げたように一番大きいものですから、平成2年を基準年に県教委は計算しますが、残念ながら35%です。

ちなみにこの12区は、平成2年に対して平成31年は49.4%、半分になりますが、それ以上に木曽は減っていくという状況の中で、我々としては、第10回でしたか、木曽高校と木曽山林高校を統合すると、木曽高校をベースにしながら統合していこうという方向付けをさせてきていただいております。

ということで今、宮川委員から意見をいただきましたが、今日、場合によったらということ踏まえて、一応、県教委にお願いをして、欠席のお三方にもご意見をいただいております。一応お三方とも今の状況で、同じ校数の、当然学級数増ということ踏まえてのご意見をいただいておりますけれども、同じ校数の維持は困難であると、言い方は多少違いますが、お三方とも同様の意見です。

紹介をしておきますが、ほかに今言われたようなことを踏まえて、追加、補足等のご意見がありましたら。よろしいですか。

それでは、どこの高校はどうというのは別として、やはりどう4校維持ということではなくて、統合なりを踏まえての再編ということが、必要であるということで、我々とすれば、これからの議論を進めていくと、いうことでよろしいでしょうか。

(鈴木委員)

前半の最後のところで委員長が、この地区から豊科とか穂高への動きについて、調整区の意向を含めた形で説明があったのですが、これも既に何度か発言していることなんですけれども、この大系線沿線の学校が7校あって、25学級募集、1,000人募集なんですね。ただ南安と大町、北安を含めると、ほぼ中学生が1,500人いるんです。

どういう図式になっているかという、大北から200名がほぼ流れるわけです。100名強が南安。100名弱が松塩地区へ流れるわけです。100名規模で南安から北へ上ってくると。1回目だか2回目に今井委員が「大系線の高校生の荒れ」、行動面の問題点を指摘されていますけれども。大系線のキャパというのは狭いんじゃないか、もちろん松本市内のいわゆる進学校に対する、今の状況の中で、進学熱が高いということから言って、市内校へ行きたいという、そのことは否定しないのだけれど、先ほど木曽高と大町高が比較があったんだけど、例えば大町高が新しい学校になって、進学実績などを高めて、地域の進学要望に応えられるような、それが魅力づくりだと思うんですけども、その辺のところを合わせながら、報告が書けるんじゃないかと思うんですね。

今言った500人が、大系線からは、少なくとも南へ移動する。単に移動だけではなくて、きっとそれ以上の、行ったり来たりが、そのことが先ほども言いましたが、10年、15年という向こうを、見ながらやる高校改革ということであれば、検討していかなければいけないことじゃないかと思います。

もちろん白馬高校というのが、特に白馬村というよりも小谷村の生徒の、通学教育機会を保証するために必要な学校であって、そのための存続のための魅力づくりを一方では我々は強く要望するという、そういう書き方はもちろん、しなくてはいけないと思うんですが、今言った、この地区の4校を3校にというのは、むしろ我々の第1回のときに話をした、魅力付けから始めようという、その議論とは逆行して、県の再編整備候補案に、大きく左右された議論で、まとめようとしているものではないかと思うわけです。

私はこの地域の4校を、大系線全体のところから見ながらも、さらに4校の魅力づくりということを期待しながら、存続という形は十分にあるのではないかと、あり得るのではないかというふうに考えます。

(中條委員長)

今のご意見に対してご発言ございますか。

(小山委員)

学級数を増やせば統合しなくていいかというと、ちょっと問題があると思いますが、と
いって、学級数が現状維持だと、統合しなければいけないというのも、また魅力づくりと
いう点から考えても、ちょっと拙速すぎるというか、急な結論かなと思います。

今委員長のそういった方向性は、急すぎるという気もしますが....。

(中條委員長)

小山委員としてのご意見は。

(小山委員)

ということですか。

(中條委員長)

「学級数の数だけで、統合しよう」ということを我々が議論してきているわけではない
し、先ほどのようなご意見に関して言えば、統合ということと、魅力付けが相反するようなこと
では、決してないと思います。

ただ、今日の議論とは、「学級数を増やせば、維持できるはずだ」ということを、我々と
してどうとらえるかを、議論してきていると私は理解しているし、これまで議事を進めて
きたつもりであります。

(小山委員)

先ほどの委員長のご発言だと、「増やさなければ統合」という方向性でいくというご意見
ですよね。

(中條委員長)

いや、ですから増やすことによって4校が維持できるのかということを、議論する中で、
例えばいろんな観点からのご意見をいただいた上で、統合ということの意見のほうが多か
ったのかなということを、私なりに今判断をした上で、皆さんにお諮りをしたということ
です。それに対して鈴木委員から、そうではないんじゃないかという発言があったという
ことになりましたが。

従って例えば、もっといえば、では4学級、3学級とあって、別に大町、大町北の統合
を前提にしているわけでは、それが決まると、いうつもりではないですが、じゃあ5学
級、4学級にして、9学級であったとしても1校としてあり得ると思いますが。それだけの
規模を持ったほうが、魅力付けをされるという、もし高校があれば。

実際上田高校は、県内で唯一9学級の高校です。それは大きいことはいいいことだとい
うことでは決してありませんが、上田地区に残念ながら、生徒数増に対応しての高校新設が
されなかったというのは、結果背景にはあるようですが、結果として現在上田高校が、県
内で唯一9学級を持った高校になっております。

大きければいいことだということでは、決してありませんが、大きなことで享受できる
メリット、それから小さなことで享受できるメリット、それを我々メリット、デメリット

両方考えながら、これまで12回議論してきていて、先ほど丸山委員からも、まとめといえますか、これまでの議論を踏まえての発言がいろいろありましたが、ある程度の規模も必要ではないかと、ということで先ほども発言されたと聞いています。

従ってもっといえば、2学級増やして、4校が維持できて、4校そのものがその規模で、これからも将来にわたって子どもたちに、魅力付けができるかということを、皆さん考えながら発言をしてきていただいていると思っています。

そういう前提の中で、いや、それはやはり難しいじゃないかということであれば、どこどこは、これから議論する内容ですが、維持は難しいだろうと、ある程度再編ということを将来的に考えたほうが、いいんじゃないかという発言が、多かったと私は理解しました。必要があれば、それから欠席された方も、今日の残念ながら、この中には出席されていないので、それを踏まえて、またもしかしたら、ご意見が変わる方もいるのかもしれないけれども、欠席を前提にこれまでの12回の意見交換を踏まえての、ご意見を伺った中で、同様のお三方もご意見だということを、紹介させていただきました。

賛成だから紹介したのではなくて、反対でももちろん紹介はします。

(小山委員)

分かりました。

(中條委員長)

ほかにご意見ございますか。

(宮川委員)

今の大北の話で、こういう話になっているわけですが、11区も今度その話のほうになるわけです。そのときまた魅力の話が出ると思うんですね。例えば深志と蟻ヶ崎が同じ魅力だったら、一緒になって規模が大きくなったほうが、先ほど言った小口さんじゃないですが、もっといいものができるんじゃないかと、そういう議論が当然されていくと思うのです。

そのひとつの過程として、もしここで今日そういう議論ができないと、じゃあ11はどうなるのかと、そうすると第3通学区みたいに、木曽でひとつ減らすなら大北でひとつ減らすと、それなら松本でもひとつ減らせばいいじゃないかと、勝手な理論で、魅力じゃないところで、何とかそこまでやるのは大変だと思うんです。

やはり教育の問題ですから、本当にここに住む方々が、将来ひとつのほうが本当にいいのか、いやふたつのほうがいいのか、そのことをきっちりと議論していくべきだと私は思うので、今のまま議論を進めていただきたいと思います。

(中條委員長)

ほかにご意見がございますか。紹介しておきますと、まだ1回しか出来ていなのですが、南安、松塩という中では、先ほど鈴木委員からのご発言があったように、大系線という目で見たときに、普通科のウェイトが少ないんじゃないか、特に私立等との兼ね合いもあって、松本市内に商業校がつかれなかったとか、それから当然農業基盤等があって、南安曇

農業がある等々で、大系線沿線の特に南安曇では、専門校、職業科といっただけとはいけないかもしれませんが、専門校のウェイトが高いと。

それから将来的には、今3学級ずつでいいですかね、将来的には2学級も予想される中で、先ほども藤本委員ですか、ありましたが、ややもすると、農協のJAの調査なんです、不本意的な子どもたちが、農業高校にいないだろうかと、いうアンケート結果も紹介いただいたりをする中で、それをいかに本意に変えていくかという魅力付けと、それから場合によったら、農業高校と商業高校をジョイント的に統合する中で、農業から商業へ行く、逆に農業も個人経営等を含めて、経営知識は非常に必要です。今、農業簿記もないと確か確定申告できないはずですから、そうなるとその逆も含めて、そういった多様化というか、キャリアの選択の幅を広げるということも、あっていいだろうと。

一方で、普通科の数が少ないということを、場合によったらそこに増やしてもどうかという。これは何の合意もありません、一委員の発言もありました。そうしたことを沿線全体で考えたときに、やはり集まりやすいところに増やしていくということが、自然の流れとして必要だろうというのは、あくまでも個人的見解です。

従って学級増というのが、先ほど県教委からご説明があったように、今後もしくは過去の数字に表れていれば、学級増というのは実際に行なわれてもおかしくないし、統合そのものと、それが計算ベースになっているのですが、再編そのものとその計算ベースになっている学級数というのは、必ずしも表裏一体ではないと。必要なときは学級数を増やすと、実際年度、年度でみると、4校の提言でもいただいておりますが、年度によっては、特に第11区ですか、今よりむしろ1校ぐらい増やさないと、逆に学級数が足りないというような年度も実際に出てきています。

それと今年度の募集でいうと、第4通学区ベースで見ると、残念ながら木曽山林は1級減ということで、現行3学級が2学級に減っています。林業科は2学級が1学級になってしまいました。

一方、先ほどの説明の中で、生徒数の推移の中では、松本県ヶ丘高校が、かつて1学級減らしたものをまた結果戻って7学級から8学級にということで1学級増ということで、全県的には生徒数減少ということで減っているんですが、第4通学区だけでみると、プラスマイナス、マイナス1、プラス1で全体学級数は、変わらないというのは、今年度の募集、来年4月の新入生たちへの募集ということになっています。

ということで、反対意見もございました。ほかに反対意見等、もしくは補足等ございますか。よろしいですか。

それでは、時間もそれほど残ってはいないのですが、我々として4校維持ではなくて、再編をすると、いかにそれを前提に魅力付けをしていくかということを前提に、これから議論を進めていきたいと思っております。その中で一番始めに、下川委員からご質問のあった、もう1回確認をしますが、県のたたき台たる再編案は、木曽山林へ木曽高校をとということで、我々の方向付けは逆にしましたが、その再編そのものも両方の校地、校舎を生かすと、特にその林業という実業系、専門系のところの学校林から始まったそうした施設を生かすために、両方の校地、校舎を使うということで、「てにをは」は別にして、その分は最初からそういう書き方がしてありました。

一方大町は、県の再編案としてのたたき台として、そこに大町、大町北が候補として挙

げられているのですが、これが最寄り駅、ＪＲでいうと信濃大町から北大町ということで一駅。それから距離、ちょっと覚えてなくて申し訳ないのですが、それも隣接、近接をしているということで、それから普通学級数等、物理的な施設を踏まえた上で大町高校に統合する。校地、校舎的にいえば、大町高校を統合後高校として使うというのが、たたき台に書かれていた内容です。

そして両者の違いは、どういうことかということのご質問が、下川委員からあった質問になりますので、その辺の背景、理由等を県教委から説明いただいた上で、今日、いろんな懇話会などを含めて、提言いただいたものを踏まえて、それはあくまで我々はたたき台という前提ですので、もう一度、これも１回説明はいただいているのですが、この場でもう一度再確認を含めて、確認の上で、それを前提にということでは、決してありませんが、議論を進めていきたいと思います。

（柳澤教育主幹）

冒頭、下川委員さんからご質問があった今の件でございますが、基本的にこの候補案でお示した、統合のイメージということにつきましては、「Ａ校とＢ校を統合して新たな募集を始める学校を、どちらかの敷地を使って新しい募集を始める。」これが基本にあるわけでございます。そうならないところが、幾つかあるわけでございますが、そのひとつは木曽と木曽山林のところでございます。ここはいわゆる職業科、専門高校でございますので一方が、それまでの専門高校で培ってきた教育の内容と、そういったものも新しい高校になっても受け継いでいくというようなことから、両方の校地、校舎を施設設備等を活用しながら統合していくというのが、木曽の方法でございます。

大町、大町北高校につきましては、どちらかの校舎、校地を使って、両方とも普通科でございますので、当然どちらかの校地を使ってやっていくというほうが、効果的であるということで、こういう候補案でお示したところでございます。

ただ、その際にも、それぞれ大町高校で培ってきたこれまでの進路指導の実績、あるいは大町北高校の特色、とりわけ生徒の自主活動なんかも、実績を挙げているところもあるわけでありまして、そういった両校の良さをさらに発展をさせて、統合によってより良い学習環境を、提供していけるようになるんじゃないかということで、示したということでございます。

（中條委員長）

下川委員、それでよろしいですか。

（下川委員）

統合のイメージは、今ご説明いただいたとおりですので、私が勘違いしていた部分というのは、高校再編の統合というのは、ひとつのパターンというイメージが強かったものですから、なぜこんな違いがあるのかなと、錯覚をしていた部分があったと思います。

先ほども話が出ていたのですが、第３通学区の場合は、今議論が注目されていると思いますが、やはり池上委員長さんだと思いますが、第３通学区では、この統廃合に関して、「改革は痛みを伴う」と、それについては、すべて共通に痛みを分かち合うという前提で、

そういう話は進めてこられたのではないかと思います。

冒頭の統合のイメージ、決意としてはそういうことは分かりますが、それ以降のイメージというものが、例えば、募集の停止をして次の年の募集定員はどうなるかとか、そういう先ほどの議論の中にもあったのですが、そのイメージというものが、示されていないというか、それ以降の…。

（中條委員長）

これまでの議論の12回の中で、県教委からの説明は、再編案ベースでいうと、平成19年4月の新入生ですね。従って18年の募集の段階から、A校とB校を統合して、C校としたときに平成19年に入ってくる子どもたちからC校として募集する。従ってA校とB校の子どもたちは1年生がいないという形になっていくという説明でしたが、それ以外に何か。

（下川委員）

平成19年度から実施計画が実施されるということになれば、そういうことなると思うのです。当然そういう募集停止から始まって、手順的にはそうだと思いますが、県が示された根拠というか、イメージですね。大町と大町北校が統合した場合に、じゃあ具体的にクラス数はどうなのかと、そのたたき台としてつくったときの、イメージというものをお聞かせいただければと、という意味なのですが。

（中條委員長）

イメージの中味は学級数ですか。

（下川委員）

学級数そして校地、校舎の問題。

（中條委員長）

校地、校舎は大町高校ですよ。

（下川委員）

大町高校ですよ。それに対しての…。

（中條委員長）

学級数は、現状学級数をベースに増やす年度は増やす、減らす年度は減らすということので全県的にやっていくわけですよ。「イメージ」とおっしゃる中身を教えてください。

（下川委員）

ですから、具体性のある統合の中味というか…。

(中條委員長)

分かりました。いずれにしても我々の推進委員会は方向付けをして、1年が長いかわいかは別として、県教委の考えているのは、それをベースに今、多分、下川委員がお聞きをしたい、具体的な進め方に中身を検討した上で、募集に結び付けていくということだと思いますね。

従ってまだそこまではっきりしていないのと、それから19年云々については、我々は、いったん棚上げをしています。従って見解によっては、19年度実施ということは我々としては要望しないと、これは無理だということも案としてはあり得ると思っていますし、それを申し訳ありませんが、最後に全体というか、第四全体で、個別個別に、総論的な議論的ではなくて、反対だから遅らせるとかそういうことではなくて、この学校は「このような理由がある」だから、来年からできるかもしれませんが、その統合が、それでは無理だと、何年か掛けて、これまでもソフトディングという言い方をされていましたが、そんなことが必要だということも我々が最終報告に要望として盛り込む内容としては、あり得ると思うし、ただそれをどう判断されるか分かりませんし、全県的にとか、少人数学級はある一部だけは無理だとかということで、では我々が、直して...ということも考えなければいけないのかもしれませんが、そういう意味で何かおっしゃっている意味合いでの、具体案ってありますか。

私が言った以上のことがなければ、ちょっと時間もないので議論を先に進めたいのですが。

(吉江高校教育課長)

ある意味では、「ない」というお話になってしまうのですが、ただ1点だけ申し上げますと、前から申し上げておりますように、具体的な絵を、イメージはどんな形になるのが、具体的な内容を示してほしいという、イメージもその方もお持ちだと、委員さんもお持ちだと思うんですが、私ども前々から申し上げているように、具体的な学校名が、明らかに方向性がならない段階で、そういうことがなかなかお出しにくいという中でお示ししていないのが、現状です。

それとあと委員長さんからお話がございましたように、当然ながらそれぞれの通学区ごとに必要な定員というのは、今までのやり方、それについては今までずっと議論しておりましたのでお分かりだと思いますが、そのやり方にのっとって、ちゃんとそれぞれ通学区ごとに、適正な募集定員は配置していきたいという前提で考えているということは、申し上げたいと思います。

(中條委員長)

もうちょっと具体的になったところで、我々の要望として、もし何かあればそれは検討するとして。別に大町と北を統合することを前提に議論しているわけではないので、それはもう少しあとでお願いします。

ということで、時間も限られていますので、先に議論を進めさせていただきます。先ほど、本当に4校を維持できるのかという中で、何人かの委員の方々からご発言があったように、具体的にどうするかを考えるに当たって、一番のポイントになるのは、白馬だと私

は個人的に思います。あそこが本当に維持できるのか、それもひとつの単独校として維持できるのか。地元の感情、我々含めて思いは当然ありますが、1 高校としての存続が難しいければ、そこをどうするのかというところを、やはり議論していかなければならないし、そのために具体的に、全国募集というの、聞こえはいいのですが、実際、今長野県では、飯山南が体育科でスキーだけで募集を始めました。しかし 1 名、2 名しか、実際は新潟でしたか、入学がなくて、結果としてスキーだけでは 1 学級、40 名が埋められずに、その後スキーを前提にした体育科は、スキーだけではなくて、女子バレー、剣道、野球などに拡大して何とかその学級を維持している、ただ野球とか強くなったとか効果がありますが、それが実態です。

従って白馬も前回の議事録ですか、普通科であっても特色あるクラブは全国募集しても構わないと、実際今でも、韓国、中国でしたか、学年 1 名程度、海外からもスキーをやるためにということで、留学をされている生徒さんもいらっしゃるようですが、それをもって 1 学級は駄目だとかいうのは、期待はしたいが、少し難しいのかなというのが、これまで我々がずっと議論してきたことの繰り返しになります。

従って、その成果によって、4 校全体をどのように持っていくかが、ある程度決まってくるのかなという気がしていますので、そんなことも踏まえながら、ある意味たたき台を念頭においていただいても結構ですので、それから当然魅力ということも踏まえながら、残りの時間、ご意見をいただきたいと思います。

今日ご紹介した、懇話会の白馬高校ですかね、懇話会の書かれていた部分についての、もう少し具体的な進め方とか、何か話し合われていますでしょうか。

(下川委員)

何かアクションをおこしたときに、過去の例として、前にも申し上げたように地域高校として白馬高が取り組んできた、地域高校としての役割という部分も当然あるわけですが、これは過去の反省に立って、インナーコース制をひいたときに、定員が増になって、しかしだんだん生徒は減っていると。今この時期に、小手先のものをやっても、無理だということは重々承知の上なんです、やはり身の丈にあったことを、こつこつとやっていくしかないんだろうなと思います。

現状は、いまだ取り組み中という状態ですが、中高一貫の連携型ということで、これは白馬、小谷の小・中を含めた学校の先生方と、実際にワーキンググループをつくって、実際枠組みをどういうものができるかということ、今進めて、白馬一帯の地元の子どもの取り込みを、するにはどうすればいいかということ、今やっております。

全国募集で、スキーはもちろんこれは目玉ですので、当然白馬の産業とも一体化した中で、いかなければいけないということが、当然ですが、前回も話しましたように、平成 20 年度インターハイを、財政的にも苦しい中、白馬の会場でやるという取り組みが決定されています。これも一気に全国募集といっても、1 クラス集めるとことは、当然先ほど飯山南のケースも含めて、無理だということは十分、皆さんも判断されていると思いますが、それを目標に少人数ながらも、段階的に全国募集というものを、地元の受け入れ部隊が、きちりできるような枠組みを、今行政や地域等々に呼びかけてそのすみ分けをしているというところ、です。

前回は話しましたが、今、韓国から高校１年生に１人、中学３年に１人。白馬の場合は日中友好協会というところで、中国との関係もありますし、ただ人数が少ないから、それが魅力や規模の拡大につながらないと、いわれればそれで終わってしまうわけですが、地域の特性を考えていくという上では、ひとつのものではないかなと思っております。

白馬高校ですね、先ほどいろいろ出ておりますが、ひとつはこれも押し問答になりますが、30人学級という、これは再三出ていることで、あえて話してもしょうがない、しょうがないというか、これはもう規定の定められた中で、やむを得ないことであると思います。

（中條委員長）

ありがとうございました。連携型という部分の具体的な中身というのはまだこれからですね。

（下川委員）

具体的な中身というのはどういうことですか。

（中條委員長）

例えば小・中・高の連携ということが書かれているんですが、具体的にどういう連携をして、その結果例えば中学から、小谷、白馬中から白馬高校に行きたい、もしくは行ったほうがいいというような、どうつなげるかという中身はこれからですね。

（下川委員）

はい、そうです。

（中條委員長）

はい、分かりました。

我々の議論の中では、いわゆる地域高校の必要性というのは十分に理解をすると。それを県教委のたたき台に、再編案もそういう前提で書かれているわけです。ただ実際に今、2学級といっても69名でしたかね、67名か69名しか生徒がいません。両方とも普通科があり、コース制は引いていますが、学科だと両方が普通科の学級、2学級です。

従ってもしそれが1学級になってしまうということであれば、本当にむしろ「高校白馬分校」のような形も、将来は我々の危機意識として、危惧されるというやりとりがこれまでされてきています。ただ実態は、今日もご紹介したかと思いますが、小谷が30ぐらい、白馬が100名ぐらい生徒数、中学生が大体そのくらいの規模で、今後は推移する中で、残念ながら40名しか白馬高校に進学をしていない。残り29名ですかね、20名強は、白馬、小谷という地元中学以外から進学をしている。

従って残り80の全部というわけではないにしても、やはり地元が行きたい高校に、いかにしていくかということがないと、今日の提言にもありましたが、ある意味大町地区の高校も、分校的なことも危惧されるのではないかな。それを仮に避けたら、どういう案があるのか、どういうアイデアがあるのかということを、何回かこれまでもいろいろ議論してきているわけです。ということで一応これを踏まえて、統合形態をいろいろ考えられ

るということですが、ご意見あればということをお願いいたします。

（小山委員）

先ほどから中高一貫校ということが出てくるんですが、中高一貫校は3種類ぐらい形があるとお聞きしましたが、その辺の説明をちょっといただきたいと思いますが。

（中條委員長）

では、吉江課長お願いします。

（吉江高校教育課長）

今小山委員さんからお話ございましたように、中高一貫校には3種類ございまして、ひとつ市町村立の中学校とその近隣の県立高等学校が、連携型で中高一貫校を形成するというやり方がございます。これにつきましては、中学から高校に行くに当たっての試験制度を非常に簡素化いたしまして、持っていくという内容でございまして、これはあくまでも設置者が違うというだけです。それが1点。

それと2点目は併設型というございまして、県立の中学校をつくりまして、その県立の中学校を卒業した人たちが、ほとんどが県立のその高等学校に入るとというのが2つ目の形態です。それともうひとつは、中等教育校と申しておりますが、小学校を卒業した時点で6年制の県立小・中を組み合わせた学校に入っていて、その中での一貫教育でやっていくということで、その学校の場合には、前期・後期という言い方で、前期を中等部、後期を高等部という位置付けにしている、というものの3種類でございます。

なお、全国的な流れからいきますと、併設型というのは極めて中等教育校に近いということから、次第に併設型の場合には、中等教育校に移行するような雰囲気があるということを申し加えたいと思います。

（中條委員長）

中等教育校は中・高の6年間ですか。

（吉江高校教育課長）

そうですね。

（中條委員長）

長野県にはまだ併設校ないしは中等教育校はゼロということですか。

（吉江高校教育課長）

公立校ではありません。

(中條委員長)

公立校ではないと。ただ私立で佐久長聖とか、いろんな動きがすでにあるところと、今いったことですね。という説明で小山委員よろしいですか。はい。

それから、ちょっとホームページで見ると、大町北と白馬の進学状況は、今分かります。割と白馬頑張っているのかなと私は知りましたが、違いますかね。以前 20 校でしたか、第 4 通学区の高校進路状況いただいていますますが、もし今、手持ちがないのでご紹介していただけますか。

(西牧主任教育支援主事)

お願いします。

白馬高校の進路状況でございますが、平成 16 年度、今年の卒業生ですが、卒業生総数 70 名、そのうち進学は 47 名、率にして 67.1%。内訳は 4 年制大学が 8 名で 11.4%、短大が 7 名で 10%、専修・各種学校が 32 名で 45.7%、合わせて進学は 47 名で 67.1%という状況でございます。それから就職が 14 名で 20%、それから家居その他未定、浪人も含めまして、9 名ということで 12.9%とこういう状況でございます。

過去、進学について 82%というような状況もありまして、平成 12 年度からの 5 年間の平均を取ってみましたが、次のような状況でございます。%だけですが、進学につきましては、69.4%が進学で、内訳は 4 年制大学が 21.4%、短大が 13.3%、専修・各種学校が 34.7%、合わせて 69.4%という状況でございます。それから、就職が 19%、家居・未定が 11.5%とこういう状況でございます。

大町北高校でございますが、平成 16 年度、今年の卒業生総数 106 名でございます。そのうち進学が 81 名、%にしますと 76.4%、内訳は 4 年制大学が 11 名で 10.4%、短大が 15 名で 14.2%、専修・各種学校が 55 名で 51.9%、合わせて 81 名で 76.4%という状況でございます。就職が 18 名で 17%、家居・未定が 7 名で 6.6%と、やはり少し年度によって増減があるものですから、5 年間の平均を取りましたところ、進学につきましては 70.5%、内訳は 4 年制大学が 13.4%、短大が 16.4%、専修・各種学校が 40.8%、合わせて 70.5%。それから、就職が 19.8%、家居・未定が 9.7%、こういう状況でございます。

(中條委員長)

対象になった 107 名ないしは 60 名という、男性、女性の内訳はありますか。進学とかではなくて、全体の 100 名中 60 名女性というようなものは。

(西牧主任教育支援主事)

大町北の場合には、35%が男子、女子が 65%ということでございます。白馬については、今ちょっと資料がないのですが。

(中條委員長)

白馬は男子が多いです、若干。資料はそうなっていますね。いいですね。はい。もう時間がなくなりましたので、ほかにご意見等ございましたらお願いします。

(鈴木委員)

白馬高校の先生に資料を見せてもらって分かったのですが、小谷村の平岩という駅からだと、大町まで電車で乗り継ぎなんかも含めて1時間40分なんですね。多分家からだとちょっとかかると思うんです。となると、もし白馬村に高校という施設がないと、やはり通学も不便だし、クラブ活動なんかも支障があって、自分たちの学習が保障できないという状態になると思うんですね。

今、白馬高校については非常に悩ましいところなんですけれども、我々が報告で書くターゲットの問題とも、関係してくるのかなと思うんです。というのは、この地域は25年度までは、そんなに生徒の減とかはないわけで、しかも白馬高校は既に3学級のときからもコース制で、2学級になってからも多少コース制を入れて、生徒の進学要望だとか、あるいは地域の特性ですか、そういうのに応じた努力をされているんですが、さらに中高連携という新しい学校づくりを、これからやっていく、今始まるということだと思うんですよ。そうすると一定の期間のチャンスを、期間を持つと、それがあって、それでも例えば40人以下に割り込んじゃうような、そういう状態になったときに、考えるような書き方だなと思うんですが。

(中條委員長)

すいません、地勢的なところで平岩というのは、南小谷よりは…。

(吉江高校教育課長)

北です。新潟県境です。

(中條委員長)

すいません。南小谷からしか調べてなかったものですから。そこが一番最北、子どもたちが通っている最北。なんですね。そこから白馬駅までは何分ぐらいですかね。

(鈴木委員)

南小谷で乗換えになる。そこから白馬駅へ向かうことになりますので、結構な時間を要すると思います。

(中條委員長)

松本駅からだと、南小谷止まりですし、そこから乗り換えないといけませんね。

(宮川委員)

その一番北から、向こうは糸魚川に行くわけですよ、その間には学校は全然なくて、糸魚川へ通っている、例えば糸魚川市内の高校を選ぶ人がいないということですよ。

(中條委員長)

県外は確か、だいぶ前に資料をもらいましたが。

(吉江高校教育課長)

ゼロか1名。

(中條委員長)

そうですか。

ただ家居とかそれが入らないので、それから長野高専へいってもそれはカウントされないの。

(宮川委員)

そのことは別にいいのですが、今、存続の形で白馬高校の魅力をというときに、私たちのいただいた資料ですが、教育の過程については課題、何々については課題とってあるわけですよ。かなりあって全部で6つかな。6つ課題があって、例えば下川委員や皆さんに聞きたいんですが、その課題をクリアすれば、取りあえず魅力があることで、白馬からこちら(大町方面)へ来る子どもたちが止まるということに、その魅力が付けられるんですか。せっかく課題を書いていただいて、これをこのままクリアして努力をしたとすれば、それが可能であるということ、ちょっとお聞きしたんですがね。

例えば進路指導のところで、課題は、苦労して就職してもすぐに離職してしまう卒業生がいること。進学希望者の学力保証をしなければならないとか、あるいは今以上に広く学校運営について意見を求める努力をするということ、回覧版・ホームページの魅力を一層高める、地域のたくさんの方々に理解を深めてもらうように努力すること。課題がこうして挙がっているわけですよ。ですからこれを現実にとっておられるか、やってもらえないかは別として、今後白馬高校として地域に残したいと思われた方が沢山いたときに、この課題をクリアすれば、残られる方が多くなるという予想が立つものなのですかね。

(中條委員長)

いかがですか。無理であれば、その案が無理というのではなくて、今この段階までしか来てないので、そこは例えば分からないとか、それは構いませんのでお願いします。

(下川委員)

希望も含めて、それが可能であればということだと思います。

(中條委員長)

どの時代になっても、例えばさっきもありましたが、大町から若干深志へ行くと、いうのはゼロにはならない。止めてしまえば別ですが。従って白馬・小谷から無理してでも、大町高校に行きたいというのは、あり得ますね。佐野坂を越えて行くというのは、それはゼロにはならないにしても、ただ残念だけど、120名のうちの40名という、そこをやはり変えていかなければいけないし、それから県教委に大北地区検討の前回のときに、県教委の再編案たたき台は、通学という面はあるにしても、白馬を存続させて、大町エリアを統合する案になっているので、白馬はさっきいったような現状で本当に存続できるのですか、具体的にどうするんですかという質問をしたときに、4校のままで非常に危機感はある

けれどもというのが1点と。

今日もいただいたような案を、何とか頑張って維持するしかないというような、確か解答だったと私は記憶していますが。それ以上のもしお話が、県教委サイドとしてお話がありますか。

やはり120分の30をいかに、本当は80といたいところですが、もっていくかということ、考えていかないといけないし、仮にそれが全体の減っていく中で、当然小谷、白馬も減っていくわけで、一番のリスクは、さっき鈴木委員がおっしゃったように、普通科ですから、今2学級という、80分の60幾つが、40を切ったら高校として存続できないですよ、物理的に。そうなったときに、そうならないようにする。

それからやはり教育の機会均等ということからいくと、高校があれば機会が与えられるのかもしれませんが、ある行事だとか部活だとか、一定の規模がないとできないものを、ではそういう小規模校では、どのように確保するべく努力していくのか、教員数はもちろんですが、子どもたちにとっての魅力。

そこをやはりこの大北エリアで、どうしていくかということ踏まえて、どこに方向性があるかということ、やはり考えていく必要があるのかなということが、まずはスタートというかポイントになって、それを決めることによって、こうパズルというか、方向性がでてくるような気がしています。

と言いつつ、今日はもうすいません、5時半、5時半ですよ。予定の時間の5時半になりました。ちょっと議論中途半端ではありますが、いったん欠席いただいた委員のものも含めて、今度は数も含めてですが、将来方向について議論をしてきた中で、再編ということの方向付け、ただし具体的なところは、まだ中身に入れませんでしたので、次回ということに残念ですが、させていただきたいと思います。

最初に、次回の確認だけお願いします。

（西牧主任教育支援主事）

お願いします。

今回は12月18日（日曜日）の午前を予定しています。詳細な時間、会場等については改めてご連絡申し上げたいと思います。

（中條委員長）

我々推進委員会は、できるだけ、皆さんお仕事を別に持っていらっしゃる中で、できるだけそれに支障がないようにというのを前提にしながら、ほとんど日曜日、へたをすれば3連休のど真ん中みたいな設定も一度ありましたが、開催してきています。かつ他地区の某推進委員会は、部会制にしてかつ非公開で、それも出身エリア4人の非公開論議で決まったという紹介もありました、非難のあるような紹介もありましたが...

我々は、それぞれ皆さんの出身地区で切れば、いらっしゃるわけですが、部会ということではなくて毎回その個別論議については、今日は大北、明日は木曽ということで、絞りながらも全員の、今日は11名ですが、14名のところできちっと意見を言おうということとで開会してきました。

それから、できるだけ、逆に非公開というこれまで意見が一個もなかったのも、あえて

諮りませんでしたが、できるだけ公開の場でやっていこうということでやってきました。

そういう意味で、今日は大町に場所をお借りして、地元の関係する皆さんに多数お集まりいただきまして、傍聴いただきまして、本当にありがとうございました。本当にこれだけ多数お見えの中で、拙速というものと、無駄な時間を掛ければということは、なかなか切り分けが難しいので、そこは何を以ってというのは、私自身分かりませんが、できるだけ議論を、皆さんからお聞きする中で、方向付けをしてきたつもりです。

従って本当は今日これだけの皆さんいらっしゃる中で、少なくとも大北についての我々の方向付けなりを、聞いていただければ本当は良かったのですが、残念ながら少し時間を掛けましたので、具体案については、申し訳ありません力不足で、次回に持ち越しさせてしまいました。

次回は松本エリアを中心に、午前中ということもあって、松本での開催を申し訳ありません予定しておりますので、ご了承、ご了解をいただきたいと存じます。

県から何かございますか。はい。それでは、第13回の推進委員会を終了させていただきます。ありがとうございました。